
闇色の二重奏

まーや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇色の一重奏

【Zコード】

Z0544X

【作者名】

まーや

【あらすじ】

望んだのは平穏で平凡な一生だった。夢は小学校の教師になること。それなのに気が付いたら全く知らない場所で、目の前には金髪碧眼美女が一人。しかも僕の母親と来た。いやいやいや。僕の名前は【橋本誠也】で決して【ダット】なんて名前ではなくて 唐突に異世界に放り込まれ、混乱する青年（？）の成長記。一人称で不定期更新。

いきなりな急展開

頭の周囲、で脈が打っている感覚といつのがわかるだろつか。よくよく考えてみると気持ちが悪いが、こめかみの辺りがピクピクする状態によく似ている。それに合わせて頭が痛い、と後頭部をさすればこぶが出来ていた。

そりゃそうだ。

なんたって、僕の背中には堅い床。
理由は推して知るべし。
当然転げて頭を打つたからといつ簡単で単純なことだった。
そして。

「やだ、ちょっと。大丈夫？」

僕をのぞき込むのは金髪碧眼美女。

お互の息が触れ合う程度の距離に顔をつき合わせている。しかも、彼女が僕の上に被さった状態で。

うわあ。何この状態とか思っていたら、何気なくヤバイ状態なことに気がついた。

彼女のワンピースの隙間から微妙に胸の谷間が見えている。かなり唐突ではあつたけれど、これって男としては鼻の下を伸ばしてもオッケーなシチュエーション。だよな。

更に言えば、フラグっぽいよな。これ。

しかし生憎とマジマジと見て頬を平手で叩かれるなんて趣味はないので。

「えー。ヘイキなので。とりあえず僕の上からビートで頂けませんで
しょうか?」

とりあえず、そこから視線を逸らせて紳士的対応にしてみました。まあ、こんな美女に対してもしつけに胸の谷間見てました。なん

てとても格好がいいとは思えないし。

あ、でもちらつと見えたな。でも、バレたら印象悪くなりそうな
のでそうならないようスルーする選択を取る。

「あれ？」

なんでか不思議そうな顔されたけど。

「どうして敬語なの？」

あれ、それが原因？ って、いいからとりあえず退いて欲しい。
とお願いしたらすんなり退いてくれた。

よし。これでひとまず大丈夫、と。

では、改めて状況確認しようか。

体を起こして立ち上がる。とりあえず一番痛いのは頭痛。疼いて
いるという感じに痛い。あとは……うん。お尻とか背中もちよつと
痛い。

多分受け身も取れないままがつたり倒れてしまったんだろう。

先程の状態から見ておそらく僕は彼女にぶつかり、そして押し倒
された。と。

うん。なんていうかダブルで美味しいシチュエーションだったよ
うだ。

まあ、その分体のダメージも大きかったようだけど。
そんなことを考えていると。

「ねえ、大丈夫？ やっぱり頭打ったところが痛むの？」

本気で心配そうな顔をして腰を屈める金髪碧眼美女がいた。
おっと。うつかり思考の世界に行きかけていた。

「あ、大丈夫です」

僕は金髪碧眼美女を見上げて……ん？

見上げて？

あれ。なんかおかしい。

頭の中で、警鐘が鳴る。といつのさいにいつことを指すんだろう
か。

違和感にふと周囲を眺めて、僕は肩の辺りにあるテーブルに気が

付いた。そのテーブルはかなり大きく、備え付けてある椅子もまたそれに合わせて大きい。

そう。僕を見つめる金髪碧眼美女がぴたり丁度と思える大きさで。

「なにこれ、巨人の国？」

思わず洩らしたのはどこかのおどぎ話を思い出したからだつたが。

「ちょっと。ダット！？」

金髪碧眼美女は蒼白になつた。

あれ。ちょっと待つて。僕なにかした？

「や、やっぱりさつき頭売つたのが原因なのかしら。び、どうしまじゅう。お医者様？ そう。お医者様呼ばないと駄目かしら？」
なにやら慌ただしくなつて参りましたが、彼女がどうしてそんなに慌てるのかさっぱりです。

多分おそれく、いや、絶対。僕に原因があることは間違いないけど。

いや、それにしても妙だ。

どうしてこの金髪碧眼美女はこんなにも僕のことを探るんだろう。

他人なのに。

「い、いえ。まずあの人と言つべきなのかしら。ああああ、どうしたらっ」

「あの」

控えめに声をかけてみる。が、聞こえていない様子。

仕方がないので、蒼白になつた頭を抱えてオロオロしたじめた金髪碧眼美女のワンピース。その裾を引っ張つてみた。

「あーの一ー

少し大きめの声で。

そうしたらようやく彼女は気が付いたみたいで、僕の方を向いてくれた。少し涙目になつて『いるのがいたたまれないけど。でも疑問をちゃんと明らかにするのが先だ。』

けど、思えぼいのとをかうべし考えて発言するべきだったのかも
しない。

それでも、このときわれしか考えられなかつたんだから仕方な
い。

「お姉さん、誰？」

ええ、浅はかでした。よもややうなるとは思つてもみませうでし
た。

完全なる予想外の展開が僕を待つていてた。

結論から言つと。

お医者様を呼ばれました。
わいじ。

「はい、君の名前は？」

「橋本誠也」

「年は？」

「二十歳」

「出身地は？」

「……日本だけど

白衣は着ていないけど、医者らしく中年の小父さんにじく当たり
前の質問をされたので返答したら、金髪碧眼美女に泣かれました。

泣かれる覚えないのに、びりょく。

その考えが間違いだとば、今の僕には知りよづがなかつた。

状況整理

ぶつちやけて言ひと。

一、どうも金髪碧眼美女は僕の母親らしいです。

二、でもって、僕は今十歳を迎えたばかり。

三、名前はダット。ダット・クリークス。

四、出身地はジードリクス王国のカーライルという町。ちなみに今いるのも△△。

五、ってことは△△は日本ではないわけで、じゃあ何処だつてことになるわけですが。

六、……………△△何処？

それを言つたら、また金髪碧眼美女に泣かれることになるから言わないけど。

でも、僕だつて混乱中だ。

気が付いたら金髪碧眼美女と一緒に床に倒れてたみたいだし、なんでか周りの物は全部大きいし、よくよく見たら全然全く知らない場所だし。

「うーん。記憶喪失、だと思つんですけどね」

そう言つて唸つてているのは僕を見ててくれた医者だった。

「全く違う人間だと言われたのは初めてですよ。ええ。本当に。普

通は名前も年齢もわからない状態のはずなんですが……」「うん。その意見には賛成だよ。お医者様。

普通の記憶喪失ならね。

でも、僕の場合はおそらく違つ。

自分でもよくわからぬけど、おかしいとは思うけれど、自分の顔を手鏡で見せられれば、そこまでされればわかつてしまつ。髪の色こそ黒だが、顔だちは正に金髪碧眼美女を幼くしたようなあどけなさを宿した少年そのもの。

平凡な黒髪黒目は一体何処へ行つてしまつたのか。

というぐらゐの変わりようだつた。

もちろん声だつて変声期前の子どもなわけで。つまりこれは。

「生まれ変わつたとか、そういうオチ？」

それともどつかの少年に取り憑いて体でも奪つたか。うん。後者だつたら物凄い罪悪感ありまくりだ。つていうか、僕、それだと死んだことになるのでは……？

「いやいや待て待て」

頭を振つて考え方直す。

そもそもどうしてこうなつた？

僕はこの場所にいるところの自覚が出来る前はビリビリしたのだらうが。

まずはそこからだ。

といつこといで、こいつなる前の記憶を引っ張り出すことにした。

まず、僕の名前は橋本誠也。年は二十歳。職業は大学生。要するに、学生だつたわけだけど。将来の夢は小学校教師。

地味で、平凡で、当たり前の生活がしたいと望んでいた。

他の連中は逆玉で金持ちになる海外でスロット当ててやるとか、冗談風味にでかい口叩いてたけど、就職が世知辛いこのご時世。そんなギャンブルめいた危ういことをする勇気も志も持たない僕には遠い話だった。

それを「意氣地なし」だの「タマなし」だの揶揄されることもあつたけど、それなりに楽しい学生生活を送っていた。

まあ、大学行く条件に学費の半分は自分で出す。つて約束してたからバイトもいろいろしてたけど。

そこそこ充実した毎日だったんじゃないかと思う。

そう。至つて平凡な大学生活をしていたはずだったんだけど。

「お、いたい。 ょう。 橋本」

講義終了後にやつってきたのは、今時のピアスやらファッショングを包んだ女子からも人気の高い男。

名前は神谷修平。

いくつか僕と同じ講義を取つていて、隣に座ることも少なくない。今のところは友人未満のよく話をする知人である。

その容姿の、とくちゃらんぽらんに見えるが、実は結構真面目で講義をさぼっているのを見たことがない。のに、遊びにも手を抜かない器用な男。というのが僕から見た彼の評価だ。

「あ、神谷。 どした？」

気が付けば毎回違う女子が隣にいる。そんな彼に相応しく今日も今日とて見知らぬ女子が一人側に立っていた。

今日日珍しく髪を染めていない黒髪女子である。しかも、今まで神谷というこの男が連れ歩いていたコンサバ系統の女子ではない。

「宗監替えした？」

思わずそう問いを発してしまつほど、彼の好みには見えなかつた。全身を黒で埋め尽くし、おおよそ地味めな独自ファッション。顔は美人だが、ちょっと目がきつい。

うーん。黒でゴシックロリータだつたか。

そんな連中がうろついているのは見たことがあるが、その辺とはまた一線を画した雰囲気がある女子だ。

「あー、違う違う。この人は法学部の伏見先輩。お前に用があるんだと」「

「僕?」

先輩で、僕に用とは一体なんだ。

まさか告白?

いや待て。

僕は彼女を知らない。というかここで期待はいかんだろう。意識して実は違いましたじゃ、痛い。痛すぎる。

「じゃ、紹介終了。つてことで。オレはお暇する。後で成果を報告しろよー」

神谷の方はどこかおもろがつてさつと退場。

アイツ、今度合つたらシメテヤル。

結局残されたのは僕とその伏見先輩という女子だけ……ではない。現在の場所は講義終了後の教室である。当然周囲には人の目が。流石にここで告白とかはないはずだ。よほどの物好きなら別だけど。とか考えていると伏見先輩が僕がいる方向に動いた。

「やっぱり、あなただわ」

切れ長の瞳が僕を捉える。

正直に言つていいいだろうか。

僕も彼女と同じ目の色のはずなんだけど、異様に怖い。なんとかわからないけど、ホントに。マジで。

目が据わっているわけでもない、楽しんでいるわけでもない。えて言うなら、他の奴らにあるような感情が見えないとしつづべきか。そんな彼女の目に捉えられて動けない僕の目の前に伏見先輩は立つ。

そして。

「気をつけて。あなた、さらわれるかも」
予想外の言葉は発せられた。

「特に雨の日は危険。出かけない方が身のためよ
あまりにも唐突すぎてその後は声が出なかつた。
というか、なにそれ。

予測の範疇にない斜め上の《告白》は状況を飲み込もうと混乱す
る以外、僕の全ての反応を奪つた。

「じゃあ、忠告はしたわ。無駄かもしれないけど
用は済んだ。とばかりに僕に背を向けると去つていいく先輩。
呼び止め、問い合わせる間もない。

「……何アレ」

とりあえず、周囲の講義仲間に問いかけてみたけれど。

「俺らが知るわけないじゃん」

はい。その通り。

だけど、後になつて思えばこれがきっかけというか原因だつたん
ではなかろうか。

僕の記憶が途切れているのはこの翌日。
彼女が言つ雨が降つた日だった。

天気予報

奇妙な先輩に出会つた翌日の天気予報は曇り。

ちなみに降水確率は午前中は三十パーセント。午後は五十パーセント。

家を出るときに「傘を持つていきなさい」と母親に持たされたわけだけども、僕の心境は複雑だった。

家を出て空を見上げる。

雲は多いが、晴れ間も見える六月独特の天気だろう。要は梅雨。今日の講義は教授のご都合で午前中のみ。

例の先輩に言われたからというか、なんというか。気分的に行きたくない状態だったが、学業は疎かにしないと密かに立てた誓いもある。

伊達に小学校、中学校、高校と皆勤賞を取つてきたわけじゃない。それにここまでこう来ると大学もやってやろう、って気にならないだろうか。

目指せ、大学も皆勤賞！

……うん。こう、流れ的にね。

ともかく、現状大学を休むという行為をするつもりはなかつたし、夕方にはバイトが入つていて、家を出ないわけにはいかない。

それに、午前中ぐらいは雨大丈夫っぽかつたし。

っていうか、なんで僕あの先輩の言つこと気にしてるんだろう。「いやいや、あんないきなりオカルトっぽい電波な話……」

実際にあるわけない。

あの先輩の目は怖かつたけど。

そんなわけで、大学に行って、講義を受けて、午後は適当に時間

を潰して、夕方にバイトに行つて。

その間、雨は降りませんでした。

おしまい。

ああ。ホントにこれでおしまいだつたら、よかつた。
よかつたんだけど、そつはならない。
ならなかつたからこそ、僕は奇妙なことになつたわけ。
雨はバイトの後にやつてきた。

「土砂降り……」

朝から晩まで降るはずだつた量が全部一度にやつてきたんじやない
か……？と思えるほどに大きな雨粒が凄い音を立て降り注いでいる。

正直、ビニールハウスとか穴が空いてもおかしくないんじやない
かつてくらいに。

その証拠に。

傘を差して一歩外に出た途端、その重量が一倍以上に増えた。
普通なら「トントントン」と程度の雨音なのに今は「ドドドドドドドド」とまるで滝のような音がする。

雷も光つては鳴り、光つては鳴り。

昔、光つてから三秒以内に音がしたら物凄い近い証拠だつて聞いた気がするけど……うん。

空気がビリビリと震えてるし轟音だから耳も痛い。

しかも光つてからいつ鳴るかわからないわけで、構えていてもドキリとする。

いや、別に怖いとかそういうわけじゃないけど。
いつ来るかわからない驚きというのが厄介つてだけで。
しかも、気温のせいなのか歩く場所歩く場所モヤだらけ。
視界が悪すぎる。

この状態で歩くのは危険だらう。とにかく近くのコンビニへ。

横断歩道も目の前で足早に駆け抜けて……滑った。

しかも道路の真ん中で。

頭に物凄い衝撃を受けたのは覚えている。

実のところそれが最後の記憶であり、現在に繋がる記憶、だったりした。

「うあー」

ベッドの上で悶える。

なんとも情けない最期ではなかろうか。
いや、あれで本当に死んだのなら。という注釈がつくけども。
この状態を見るに、あの伏見先輩の言つたことが見事に的中した
っぽい。

微妙に違つけど。

それともあれはただの偶然だったのか。

「ダット」

金髪碧眼美女がそんな僕を戸惑いながら見つめている。

あ、ヤバイ。泣きそうな顔だ。

「えつと。よくわからないんですけど。あなたが僕のお母さん？」

「……っ！」

あ、泣いた。

「どうしてこんなことにつ。ああっ。でもわたしが悪いんだわ。慌ててたから、ダットが部屋に入ってきてたことにも気付かずにぶつかつてつ！『ごめんなさいダット！』

大泣きして、ベッドの上の僕にしがみつく。

つてか、痛い。イタ、痛いってば！

この人、凄く力が強い。

胸の辺りが彼女の腕で見事に締め付けられて息が出来ない。

「ちょ、はなし……」

死ぬ。死ねる。息がつ。

「あー、コホン。おかあさん。息子さんが苦しがっていますので、その辺りで」

ありがとう。お医者様。

あなたのおかげで死なずにすみました。

肩を叩かれた金髪碧眼美女ははつと我に返つて離してくれた。「えー、とりあえず。記憶がない以外は特に問題ないようですね。まあ、記憶がおかしいというのは……まだ頭を打ったばかりですから混乱しているだけかもせんし。何日か様子を見てみましょう。時間の経過で記憶が戻る場合もありますし」

「ほ、本当ですか?」

「ええ。もちろんこのままという場合もあり得ますが」

金髪碧眼美女の目に再び涙が浮かぶ。

いや、まあ。なんとなく気持ちはわかるけど、対応に困るのでとりあえず泣くのは止めてもらいたい。

「痛み止めの薬は処方しますので、ひとまずそれで経過を。あとは……そうですね。普段と同じ生活をさせてあげてください。ふとしたことでも何か思い出すきつかけになるでしょうから」

「はい、わかりました。ありがとうございます」

その会話を最後に医者が色々と道具を片づけて出て行く。

金髪碧眼美女もそれを追つたので、現在部屋には自分一人きり。
「…………はー。なんじゃこれー」

未だに痛む頭を抱えて唸る。

どう考へても普通じやない。

自分の部屋だと言われて連れてこられたこの場所。子供用のベッドとか勉強机っぽいのとかいろいろあるけど、どう考へても【橋本誠也】のものではない。

そして、ベッドが置いてある場所から見える窓の外も見慣れた四

角いビルなど存在しない。

あるのはいつかテレビの旅番組で見たようなヨーロッパで見かける風景に酷似していて、まるでジージャのテーマパークのようだ。

「わけがわからん」

なにがどうしてこうなったのか。

いや、多分原因はあの雨の日にすつころんと頭を打ったからなんだろうが。

なにをどうしたら自分は十歳で、ダット・クリークスなんて別人になっているのか。

しかも聞いたことない国で、町で、服を見てみたら完全に昔風味。これで混乱するなという方が無理というもの。

僕、これからどうなるんでしょうか。

誰ともなしに、いきなり放り出された場所に問いかける。今はそれしか出来ないのが少し寂しくて悲しかった。

実のところ。

僕が気が付いていないだけで、あとでびっくりすることがまだいくつありました。

中でも、なぜ最初に気付かなかつたのかと思ったのは言葉。普通に聞いて普通に喋つて、それで理解できていたから全然まったく気が付いてなかつたんだけど、実は金髪碧眼美女とか僕が喋っていたのは日本語じやなかつた。

金髪碧眼美女で日本語が流暢に喋れるとか、そんな人間が早々いるはずもない。

それに気が付いたのは、僕がというかダットが読んでいたらしい本を見せられた時。

それこそ文字通り、目が点になつた。

漢字でもなく、ひらがなでもなく、カタカナでもなく、アルファベットでもない。

強いて言うなら……ハングル語？ を崩してさらに細かくしたような字が書いてあつた。

うーん。わかりづらいか。

ともかくそんな感じで、文法は英語に近い。

完全に見たことない文字だが、しっかりと脳内で読めているのはたぶんこの体がそれを覚えているからなのだと思う。

しかし、それ以上に困惑したのは読んだ本のタイトルだった。

「【魔法基礎読本】」

物凄く嘘くさいと思つたのは僕だけだろうか。

魔法なんて代物は空想の世界の產物だつてことは常識。

子供向けに絵でわかりやすく説明されていて読み物としては面白かつたけど……とりあえず、適当に田を通じてその辺に放置。

何かを期待する田でお母様に見られましたが。ええ、何もありませんとも。

そのあと涙目になつてたけどね。

ああ、そうだ。

母親がいるつていうことは、父親もいるつていうことで。

僕、ダットが頭を打つて記憶喪失になつたという知らせを受けて家に帰ってきた彼は、厳つい顔で、何故か鎧つぽいものに身を包んだ熊みたいな黒髪の大男。

それを見た瞬間凍り付くしかなかつた僕は、肩を掴まれ。

「ダット。父さんだ。わかるか？」

ひげ面の彼に迫られました。

厳つい顔にひげ面は、かなり迫力がある。まさに泣く子も黙るうかという状態。

いや、でも知らないものは知らないわけで。

「わかりません」

素直に言つたらこの人にも泣かれました。

涙する大男なんて怖すぎる。つか引く。

まあ、原因は言わずもがな僕なわけだけど。罪悪感もあるんだけど。でもここで嘘付くわけにもいかないし。

とか思つてたら金髪碧眼美女も混ざつて泣き始めた。

流石に何か言わなきや、と思つて「『ごめん』って謝つたんだけど。これが失敗だつた。

感極まつた一人に同時に抱きすくめられて体がみしりと軋みましたよ。ええ。軽く意識が遠退いたとも。

二人とも力が強すぎる。殺す気か。

それはさておき。

新しい情報も含め、もう一度現状を把握するために整理する。まず、僕の名前はダット・クリークス。

どうにも泣き上戸っぽい金髪碧眼美女が母親で名前はキーラ。

厳めしいひげ面の大男が父親のガリオ。

母親の方は専業主婦で、父親の方は聞いたら町の自警団の副団長だった。

「自警団ってなに？」

と思わず聞いたら、それも忘れたのかと意氣消沈されたが一応説明してくれた。

その内容は、少しばかり信じがたいものだったけど。

「自警団ってのはな。町を守る雄志の集まりだ。仕事は町の治安を維持することと、町の外にいる凶暴な魔物から町を守ること」

うん。前半は納得した。

けど後半部分の魔物って何だ魔物って。

「何！？ 魔物のことも忘れたのか？」

すみません。忘れたんじゃなくて、わからないんですね。とは流石に言えない。

「魔物はな、危険なんだ。人間が自分の縄張りにやつてくりや、容赦なく襲う。逆に言えば、縄張りにさえ入らなきゃ安全つてことになるんだが一概にそうとは言えねえ。はぐれたり、食料がなかつたりすりや、人間の住む場所にやつてきて人間も襲う。魔物つてのはそういうやつらだ。姿形もいろいろでな。地を駆ける奴もいれば、空を飛ぶ奴もいる。水の中にもいるらしいが……オレは見たことがねえ。普通の人間にや、相手は無理だ。ちゃんと鍛えた奴か、魔法使える奴が何人かで組んでやらねえと死人が出る。中には一人でやる奴もいるが、まあそりや特別な人間だな」

えーと。

まとめるとつまり、ここには見た目通り日本ではあり得ないわけで。

しかも地球と基本的な部分が違つていて。

日本で言つならいわゆるファンタジー系なアレつてこと。

おまけに魔法といつ言葉まで話に出てきたということは、放置した例の【魔法基礎読本】は実際に役に立つ代物だった、と。なんかゲームとかでよくある展開になつてきた気がする。

「うわあ」

そう考えたらちょっと鳥肌が立つた。

もちろんあり得ないだろ、という方向。

いや、心も少しは躍つたけどね。

それでも平凡で平穏な日々を満喫したがっていた人間としては勘弁してください、な展開だ。

かといって自分の身を顧みれば、すでにそれが回避できる状況でもないのは明らか。

「つまりはここで生きていくしかない、と」

僕の容姿はすでに【橋本誠也】ではあり得ない。

目の前で心配そうな顔つきの両親の子供。【ダット】でしかないわけで。

未だ納得いかない部分はあるものの、そういうもののなのだと受け入れなくては生きていけそうになかった。

ただ、この一人にはなんだか申し訳がないような気がしてならなければ。

「なんとなくわかつた、かな」

「そ、そう?」「

「二人がお父さんとお母さんで、僕がその子供。お母さんは専業主婦で、お父さんは自警団の副団長。町の外は危険な魔物がたくさんいる」

まずは、ここまでわかればなんとかなる。

あとは徐々に色々覚えていけば、この世界でも生きていくれるだろ。

う。

そのための努力は多分必要だけど。

でもその前に。

「ダットー！」

「ちゃんと想い出してね」

「どうやらこの両親には抱きつき癖があるらしい。」

これを改めてもうわなれば、知識を得る前に死にそつだつた。

1. 都合主義な夢空間 僕とぼくへ

とんでもない一日だった。

転んで頭を打つて田が覚めたら異世界なんて、漫画の世界だけだ
と思っていたことが実際に起こるなんて誰が思つものか。
僕自身が望んだ平穏で平凡な毎日がいきなり消え去ってしまうな
んて悲しすぎる。

だからせめて夢の中だけでは平穏であつて欲しかった。
欲しかったなんだけども。

「こんなにちは」

「どこに立っているのかわからなこよつた真つ白な夢空間。
そこでの僕はちやんと二十歳の【橋本誠也】で。けれど、田の前
には十歳の少しおつとり顔の【ダット】が立っていて。

「あれ？」

なんでこんなこと。

いや待て、整理しよう。

これは果たして本当に夢か。

「夢、だよ。ぼくらは跟つてる」

「うかうか。

じゃあ、田の前にいるのは。

「ぼくはダット。おにこさんも、そつ

「いやいや。僕はちが……ん？」

あれ、今僕声に出してたかな。

「ううん。出してなによ。でも、ぼくはおにこちゃんと回じものだか

ら。考えることは全部わかる

「わあ。それってヤバイ。

全部筒抜け。隠し事不可能。妄想も……いや駄目だな。
相手は十歳。危険すぎる。

「うん。でもどっちもぼくだからあんまり関係ない、かな」
それはそうかもしれないが、つて。

「待て待て待て」

今、聞き捨てならないことを聞いたような気がする。
ダット少年よ。まず聞こう。

「君は誰かな?」

「ダットだよ。正確には今のおにいさんが忘れてる、この世界に生まれついた【ダット】の十年間の記憶、だけど」
はい、爆弾発言来ました。

つていうか待つて。何ソレ。

「……わからなくは、ないはずだけど」

ダット少年はきょとんと僕を見上げる。

「おにいさんもなんとなく気が付いているはず

「何を」

「だつて、いろいろ考えてたでしょ。自分はあの大雨の日に転んで死んで、生まれ変わったんじゃないのかとか、死んで違う世界の【ダット】に憑依しちゃったんじゃないのか。つて」

「あ……」

そう。確かにそれは考えた。

本物のダットはどこへ行つたのか。もしかして追いついたのかも。
とか。

あまりにもオカルトじみた発想だけど、実際そうだとしたら本人にもその両親にも謝つても謝りきれない罪を犯したことになる。
そりや罪悪感でいっぱいにもなるわー。

しかし、目の前には【ダット】と名乗る少年がいて。

「実はね。どっちも正解と言えば正解

「……はー?」

一度田のトンデモ発言をしてくれた。

「本当に死んじやつたのかはぼくにはよくわからないけど、確かにぼくは生まれて十年間ここで過ごした。向こうの世界の記憶はなかつたけど。でもね、ずっと違和感を感じた。きっとそれがおにいさんだつたんだね」

ダット少年はそう言つて僕を指示す。

「どうしても、この世界が不自然に見えて仕方なかつた。この世界は自分がいる場所じゃないって思つてた。お父さんとお母さんも好きだし、友だちだつているけど。でも自分だけ取り残されてる感じがして。疎外感つていうのかな。こういうの難しい言葉知つてるね。疎外感。十歳なのに。

思わず心の中で茶々を入れてしまつたが、ダット少年見事に無視。あ、うん。疎外感感じたよ。今。

でも、ダット少年の次の言葉に遊んでいる場合ではないことに気が付く。

「ずっとやう考えてきて、考えて続けて。そしたらこいつなつたんだ。わかる?」

彼が押されたのは自分の後頭部。

その姿に、僕ははつと我に返つた。
まさか。

「頭を打つて、思い出した?」

「正解」

ダット少年が笑う。

【橋本誠也】だった過去をね。それで思い出したんだ。でも打ち所が悪かつたせいで【ダット】の十年間が飛んじやつたみたい

だからあの医者の言つた記憶喪失も正解なのだとダット少年は言つ。

「それが、僕?」

「うん」

まさになんてこつた。だ。

けれどこれで少し納得もいった。

つまり。

「最初に言つたように、ぼくはおにいさんで、おにいさんぼく。ぼくは【橋本誠也】の記憶が戻つたことで違和感の理由がわかつてすつきりしたし、多分おにいさんもどうして自分が【ダット】のかこれではつきりしたんじゃない?」

……確かに、そういうことなら大部分の疑問が解消される。が、それでも納得いかない部分についてはどうだろ?」

例えば。

「ここの日本じゃないよな」

「うん。ここのジードリクス王国のカーライル。二ホンって国は聞いたことない」

「どう見ても生活水準が二十一世紀とは思えないんだけど」

「向こうにあつたものはほとんどないって思った方がいいかも。キ

カイとか。その代わり魔法があるよ」

その時点で紛れもなく別世界判定チェック付けないと駄目よなあ。やつぱり。

「魔物もいるし。その認識でいいと思う」

でも、僕が一番に疑問なのはソコじゃない。

「普通、生まれ変わるって言つたら同じ世界だね」

そう。コレだ。

輪廻転生とかそういう話は、宗教というか、昔話というか、日本でも色々あるし珍しくない。

だけど、こんないきなり異世界で生まれ変わるとか思わない。

まあ、そもそもが普通こんな記憶があつて生まれ変わつてるとかいう 자체があり得ない状態なんだからさ。

「受け容れられないって思つてる?」

ダット少年が少し困った顔で僕を見上げる。

う、そんな悲しげな目で見るのはやめてほしい。

「な、納得いかないだけだよ。それだけだから気にするな」

つていうか、なんで僕。自分で自分を慰めるような真似しないと
いけないんだわ。

「でもそれ、明らかに拒否してるよね」

「あ、突っ込まれた。

「やっぱり、向こうの世界の方がよかつた？ 帰りたいの？」

「それ、未練があるかどうかってことか？」

「うん」

はつきり聞いてくるなあ。ダット少年。

「まあ、普通に平凡に生きられたら満足だつて思つてたし。その目標に達する前に死んだのはちょっと微妙」

せめて、彼女作つて結婚して子供と遊ぶ……ぐらいのことははしたかった。

考えていることが筒抜けだから、ダット少年に呆れられたけど。「ちょっとつていうか、未練がいっぱいあるみたいにみえる。贅沢つるわー。それぐらい夢見てもいいだらうが。

「……悪いとは言わないけど。でも死んでるから、意味ないね」

おー。何気なく発言に棘あるな。ダット少年。

「だつて、今この世界で生きてるのはほんくだもの」

「う、そうだった」

言つまでもなく【橋本誠也】はすでに死んだ身。主導権が【ダット】にあるのは当然のことだと今さらながらに気が付いた。

ダット少年。僕が悪かった。

現状を否定するのは、自分を否定する」とに等しいとやつと氣付く。

「でも、おにいさんもぼくだから。気持ちはちゃんとわかってる。だから、おにいさんの希望通りにはいかないかもしねいけど。ぼくもちゃんとぼくが生きたいように生きるよ」

それが前世である僕へ向けて出来るる唯一のことだから。

最後の言葉は口には出ていなかつたけれど、ちゃんと云わつてきた。

まあ、ダット少年が眞つまつに彼も僕だから出来ぬ筋道なわけだけど。

「あ、そろそろ起きないと。おとつかことおかあさん心配かけすぎたから。あやまちなきや」

ダット少年が僕に向かつて手を伸ばす。

「……そだな。僕、思いつきり失礼なこと言つたし」

誰、とか。敬語で喋るとか。

あれは正直あの時点でも泣かせやきたとかよつて呟いてる。
「こはやはや、わけんと謝らなことこけない。

「行こうか」

僕の手が、差し出されたダット少年に触れ。
夢の世界は消失した。

謝罪と決意

日が昇り、朝日が差し込む部屋の中。

「「めんなさい」」

包帯を巻いた僕が頭を下げたこと、やつと両親は驚いたことだ
るべ。

朝の「おはよう」「やあこまわ」の直後である。やじド誰が息子の謝
罪を聞くと思うだろ？

うん。きっと僕がその立場でも驚くと思ひ。

ごめんな、ホント。混乱させて。

でも、やつとこれから話すことは更に一人を混乱させるに違いな
い。

だからこれは、それを含めての謝罪だ。

まだあまり動かない方がいいとベッドの上に座る僕に、一人は困
惑した顔で話しかけてきた。

「だ、ダット。どうして謝るの？」

「そうだぞ。なんていきなり」

あ、なんかまた母さんが泣きそうな顔をしていく。

昨日の今日だもんな。更におかしくなったんではと心配されて
も仕方ないかも。

これは早くフォローした方がよむやつだ。

「違うよ。その、ちゃんと思い出したんだ。僕が父さんと母さんの
子供だったこと。だから」

「え……？」

「心配かけて」「めんなさい」

ぽかん、とただ僕を見つめる一人にもう一度頭を下げる。

両親が息を飲む音が聞こえた。そして、数瞬の間呼吸音も消える。

まるで時間が止まつたかのような感覚。

ふう、とまるで呼吸を忘れていたかのように息を吐き出したのは母さんだった。

「え、あ。思い、出したの？」

「じゃあ……？」

「うん。記憶喪失はおしまい」

下げていた頭を上げてにこりと笑つてみせれば母さんの目に涙が溢れた。そのまま父さんに向き直り、一人は顔を見合わせる。父さんは……少し厳しい表情だったけど。多分それが、次の行動に繋がつたんだろう。

お互の顔を見て安心したのか、母さんが今にも抱きついてきもうな勢いで僕の方に体ごと向き直る。けれど。

「待て。キーラ」

父さんがそれを止めた。

その時の顔は厳つい印象に似合ひと言つては失礼だが警戒感に満ちていて。

「喜ぶのはまだ早い。ちょっとは疑え」

母さんを諫めていた。

流石は自警団に勤めていることだけはある。気付いたかな。

でも母さんはと言えば、なぜ止められるのかわからない様子で父さんを見上げている。

「ガリオ？」

「見た目に騙されるな。どうもおかしい」

鋭く僕を睨みつけた父さんは母さんを自分の体の後ろに回す。その目は得体の知れない何かを感じ取つて見えた。

まあ、中身がちょっと変わっちゃつてるから、この反応は正常と言えば正常なんだろう。

むしろ疑わなかつた母さんが軽率だったわけだけど。でも、動搖

してゐる様子だつたし、この辺はやつぱり夫婦だから父さんがフォロ
ーしてゐるわけだけど。

「剣を持つてくるべきだつたか」

「ちょっと！？」

でも待つて。それは物騒だから待つて！

自警団の一員らしい発言ではあるけれど、それはまだ早いから！

「ガリオ！」

ほら、お母さまもびっくりしてますから。また泣きやうになつて
るから！

せめて話を聞け、と僕は慌てて口を開いた。

「父さーん、僕魔物じやないよ？」

「ふん。証明が出来ると？」

冗談半分に言つたソレに、即座に返答した所を見るとどうやら僕
は魔物か何かだと思われてるっぽい。

失礼な。前世でも人間やつてたんだ。と言いたかったけど、現時
点でそれを言つのは無謀っぽい。

それならそれで、別の方法を取るまでだ。

僕が【ダツト】であるという証明。

決定的な証拠を突きつけてやる。

「十日くらいい前だつけ。旅の傭兵の色っぽいお姉さんにチューされ
てたよね。確か」

効果は抜群だつた。

一瞬の間の後。

「え……？」

母さんが父さんの背後から「今の発言はなに？」と目を何度も瞬
かせながら顔を出す。

父さんは、僕が発言した瞬間にみつともなく口を開けて固まつ
ていたが、すぐに我に返ると。

「お、おい待て」

と、慌てだした。

母さんに対する後ろめたさが、そうさせたに違いない。

何を言つてゐるんだと言わんばかりに父さんが僕を見ているけれど、証明しろと言つたのはあなたですよ。

だから、僕と父さんしか知らないことやつなことを言つのが一番なんです。申し訳ありませんが、大人しくトドメを刺されてください。

母さんに。

「僕が見てるの知つて、慌てて離れてたけど。母さんに内緒だつて飴買つてくれなかつたつけ？」

「わ、馬鹿。ダツト！？」

「…………ガリオ？」

うん。この言葉がこの世界にあるのか謎だけビ。この時の母さんの顔は幽鬼のようだつただけ言つておひつ。

合掌。

すっかり話が逸れてしまつたわけだけれど。

父さんが本来彼より弱いはずの母さんに打ち負かされる光景を見終わると、ようやく落ち着いて話が出来そうな雰囲気になつてきた。

「まず、父さんが気になつてることだけビ」

警戒心がまだ完全に抜けたわけではない」とは、父さんの引き結んだ脣からも見て取れた。

母さんはその隣で自分の腕と父さんの腕を組み合わせて不安そうに僕を見ていた。

「たぶん、僕の口調が変わつたから警戒してるんだよね」

前世の記憶が戻る前。

彼ら二人を呼ぶときは「おとうさん、おかあさん」と呼んでいた。しかもこんな風にしつかりとした口調で話したことはなかつたから、父さんがそれに警戒感を露わにしても何らおかしくない。

外から見れば、それこそ人が変わつた。別人になつたと言われるような状態だ。

たぶんそれで剣を取ろうとしたんだろう。
もしものことを考えて。

「【魔物憑き】」

僕が呟いた言葉にびっくり、と母さんが反応する。父さんの眉が動いたのも僕の目はしつかりと捉えていた。

「かもしれないって思つたんだよね」

「……そうなれば、殺すしかないからな」

だろうと思った。

【魔物憑き】とは文字通り魔物に取り憑かれた人間のことを指す。この世界には幽霊のような肉体を持たない魔物も存在していて、武器は用を為さず、魔法でしか消滅させられない。

しかもその食料は人間や魔物の【生氣】。そしてそれを奪われた生き物は、例え一時生き延びようとも必ず死に至る。

そんな魔物が人間に憑くとなるとどうなるか、逸話は山ほどある。

例えば村一つ滅ぼされたとか、一国の王様がそれで殺されたとか、それで危うく戦争になりかけたとかだ。

子どもを脅かしたりする教訓とかにも使われる所以僕も他にいくつかは知っている。ちょっとトラウマになるくらいには。

ちなみに、取り憑かれた人間は見た目はみんなと同じだから、気付かれにくい。

ただ、人が変わったようになるので近しい人間なら妙だとは感じるそうだ。

父さんが僕に対して警戒感を持つた一番の理由はこれだろう。間違いなく。

「でも僕死んでないし」

心臓は動いているし、体も温かい。

【魔物憑き】になつた人間は真っ先に【生氣】を奪われて死者となるから、ここはしつかり否定しておかなければいけないところだ。

はい、と手を伸ばすと父さんがなにやら慎重に構えた。うん。警戒するのもわかるけどや。

「昨日思いつきり抱きしめておいてそれはないんじゃないの？」

「それこそ死にかけるくらいまでやられたのに今更だつてば。む…… そうだったか？」

「ああもつ、白々しいつ。

それでもまだ油断ならないと思つてこのかゆつくり差し出された。ごつごつした手。それを僕は思いきり力を入れて掴んだ。ほらあつたかい。

僕が睨むと難しい顔をされた。

そうだらうね。じゃあ、なんでだつて感じになるよね。

「僕がこうなつた理由、これから話すよ」

多分【魔物憑き】の方がまだ理解しやすい話だらうけど。ひとつひとつ丁寧に話してもいいけど、それだと時間がかかりすぎる。

わからないといひは聞こてもらえればいいわけだし、信じてもらえないときは……あ、どうしよう。

そこまで考えてなかつた。

「ダツト?」

急に考え込んだ僕の耳に母さんの不安げな声が届く。まいつたな。昨日からこんなのはばつかりだ。ちょっと嫌気がさす。家族なのに。

「ああ、うん。とつあえず聞いてもらつてそれからだね」後のことば後のこと。

僕はそつして口を開いた。

「僕はね。前世の記憶があるんだ」と

謝罪と決意（後書き）

10 / 8 少し修正かけました。

前世ではこことは違つ理の場所で生きていたこと。
頭を打つて死んだらしいこと。

そしてまたこの世界で頭をぶつけたそれを思い出したこと。
全てを話し終えて両親が取つた行動は、

「「はあ」」

何故かため息だつた。しかもダブルで。
え、何で？

そこでどうしてため息ができるの。しかもさも呆れたように。
僕が意を決して話したつていうのに、この反応はどう取つていい
のかこちらも困る。
しかも第一声は、

「なんだか、心配して損をした気分なのはなぜかしら」
「あれだけ気を遣つて来た原因がコレとはなあ」
……ナンデスカ。ソレ。

「え、と。父さん。母さん？」

なんとなく理由を聞くのが怖いけど、聞かないと多分話が進まない。

恐る恐る問いかける。

「今のは、わかつて言つてる？」

自分の子供が実は別世界の人間の生まれ変わりでした。つていう
結構ハードな話だったはずだけど。

二人は夫婦らしくお互に通じ合つた絶妙なコンビネーションで。

「そうね。正直なところ、まだ戸惑つているんだけど」

「ああ。信じられんと思つところもないわけじゃない。だがなあ」

「ねえ」

顔を見合させて、またため息を吐いた。

ねえ。ちょっと待つて。だから何なの、そのため息は。そんな僕の心の声はどうやら顔に出でいたらしい。母さんは自分の頬に手を当てて、父さんは肩を落としつつ、なんとも言えない表情でこう言つた。

「だって、ね。前世なんて言つからりてつきり女性を巡つて命を懸けた決闘があつたとか」

「戦場で華々しく散つたとかそういう話じやないかと期待してたんだが」「

……あれ？

ちょっと待つて。何ソレ、つて。

「「雨の日元滑つて転んで頭打つたじゃなあ（ねえ）」「

見事に揃つたハーモニー。これぞ夫婦の絆がなせる技か。イヤ、違う。激しく違う。

ソレ、なんか考えるトコ違わぬないですか？

さつき僕が話したのはもっと重大な事だったはずですが。

「「うちの子はそんなに間抜けだったのかと思つと……はあ」「

いや、だから、つてまたため息吐いた上にハモつてゐし。すつごい秘密を暴露しました。つて気分だったのに。台無し。

言いたいことはわかるんだよ。すごく。

雨で、水たまりで、滑つて転んだのが原因なんて、そりや僕だって呆れる。

そんな死に方が間抜けだつてことぐらい嫌とこくらい承知してる。

でもや、まさか僕が前世持ちだつたっていう事実より、死んだ原

因の方に食いつくとは思わないし。

しかもその間抜けさを実の両親に面と向かつて言われるのも結構凹む。

……気持ち悪いがられるよりは、マシなんだけど。

「とりあえず、お前の言いたいことはわかった」

ちょっと泣きたくなつてきたところで、落胆の表情を隠さずに父さんが声をかけてくる。

「まあ《魔物憑き》じゃないならそれでいい。実際は二十歳も過ぎてるとかも……その話しかけたら納得できないこともない。異世界から来たらしい」というのも、信じがたいが多分本当なんだろう」「え？」

「お前、時々寝言で俺たちの知らない言葉を呟いてたからな。起きてるときもぼーっとしてる時とか話しかけたら使つてたろ。俺が傭兵として旅をしていた時でもあんな言葉を使う人間はいなかつた」「え、僕そんなことしてたんだ？ 記憶にないけど。

それは初耳。と目を丸くするとぽん、と頭を撫でられた。

「多分無意識に、だつたんだろうが。記憶がなくても、ちゃんと心にはそれが残つてたんだな」

父さんの言う通りかもしねない。

この世界で生まれてからの十年の間に感じていた違和感。それが僕自身の前世。異世界のことだつたわけだから、無意識にそつちの言葉を使っても不思議じやない。

今だからわかることがだけど。

でもそうか日本語か。長らく使つてないし、使う予定もないだろうけど。でも寝言でも喋つてたつてことはもしかして使える？ 思い立つたままに、口を開く。

『ぼくーが、使つてたの、てこーいつ言葉だた？』

あ、意外とはつきり発音できた。

微妙におかしいけどそれは発音の仕方に慣れてないからだらう。

舌の使い方とか違うし、外国人が喋つてるみたいだ。

実際今はそうなんだけど。

今言つたそれを今度はこちらの言葉で父さんに聞いてみる。

「うーん。まあ、そんな感じか」

寝言でしか聞いてないし、意味も意味もわからないからあまり自信がないらしい。

だけど、この世界で生きるなら使わない言語なわけだし、特にわからなくても問題はないは……。「ぐうー」……ず。

おっと、これは。

「　　あ　　」

うつかり親子三人の声がハモつた。

視線の中心にいるのは、僕でそのお腹。

「……お腹空いた」

まあ、朝ご飯も食べずに話し込んでいればこうこうとも起るわな。

恥ずかしいけど。

「あらあらあら。大変。すぐ支度するわね。あ、ガリオ。今日は自警団の仕事は？」

「あー、一応休むかもしれないとは言つてあるが、ダットがこんな感じなら行つてよさそうだなあ」

あつという間に日常会話に立ち戻つてしまつた。

「僕、手伝おうか？」

あまりにもいつも通り過ぎて思わず申し出てしまったが。

「「怪我人は大人しく寝る！」」

怒られてしまった。

そうだった。頭打つて記憶喪失になつてたんだつた。

微妙に痛む後頭部を撫で、苦笑する。

両親が去り、すっかり静かになつた部屋の中。

「よかつた」

ベッドに横になつた途端安堵のため息が出て、僕は目を閉じた。そのまま毎まで眠ってしまったのはご愛敬である。

家族と安堵（後書き）

第一章終了です。閑話（母視点）を挟んで第二章開始。

わたしの息子のダットはよつと他の子どもたちとは違っている。ひとことで言つと、ぱーっとしてることが多くおつとり系な子ども。人と喋ることが得意ではないけれど、それでも子ども同士で遊んでいるときはちゃんと喋るし笑いもする。

そんな子どもだ。

でも、ここまでなら普通の範疇に入るかもしれない。わたしの言う他の子どもたちとの違いはある。例えば、彼が一人でいる時。

ふとした瞬間に、中空を見上げて何かを呟く。

すぐ側でそれを聞いたことはないけれど、唇の動きを見ればそれがわたしが知らない言葉だというのはすぐにわかった。

そして、そういう時のダットはとても子どもとは思えない切なげな表情を浮かべている。

ここではないどこかの事を思つているらしいことは遠田からでも感じ取れた。

そんなとき、わたしはついつい思つてしまつ。

いつか、この子がどこか遠くへ行つてしまつのではないか。と。そんな恐怖が、いつもわたしの胸の奥底に渦巻いていた。

ダットが物心ついたときからそんな子どもだつたから、わたしはいつもその姿を追つていた。

目が離せなくて、ダットが子どもではない田をすくの度に抱きしめるようになった。

ダットに友だちが出来たのは四歳を過ぎてしばらくしてからだ。特異な子どもだったから、その辺りは不安だつたけれどダットが自分からわたしに「友だちができた」と言ってくれた時にはとても

嬉しかったのを覚えている。

それから、だろうか。

ダットが一人で空を見上げる」とは減つた。

けれどそれが全部なくなることはなくて。

印象的だったのは、ダットの五歳の誕生日の翌日だった。

その日は大雨で、雷も鳴って家から出るには危険なため、ダットとふたりで自宅に籠もっていた。

ダットは意外と性格が据わっているらしく、雷を怖がらない。むしろ興味があるようで、窓の前で光を放つ空を見上げていた。

「ダットは雷が好き?」

それは何気ない問いかけだった。

その直後、わたしは後悔することになる。

ダットは振り返つてにこりと笑うと、まるで昔を思って出すよひに元氣に言つたのだ。

「うん。 なつかしい」

この時のダットも、五歳の子どもとは思えないような顔をしていて、わたしはただ「そう」と恥じて抱きしめていたしか出来なかった。

この子は一体、何を背負つて生まれてきたのだろう。

はじめてそんな疑問がわたしの中を過ぎた。

わたしが今まで以上にダットに構うようになつたのはこのときからだと思つ。

ダットがわたしの子どもだとこいつを強く刻みつけるように抱きしめ続けた。

七歳を過ぎた頃からは恥ずかしことすぐに逃げられてしまつようになつたけれど。

夫であるガリオも、ダットの奇妙さを間近で知つていて、わたしの行為を咎めることがなかつた。

むしろ、わたしと同じように積極的にダットと触れ合おうとしている。

自警団の副団長をしているガリオは夜中近くに帰つてくることも珍しくない。けれどダットをとても愛していて、帰つてくると必ずダットの部屋に寝顔を見に行く。

そしてたまにダットが寝言で彼の知らない言葉を呟くのを何度も聞いているそうだ。

ガリオはわたしと結婚する前、旅の傭兵だった。いくつも国を渡つていろんな国の言葉を知つていてけれど、ダットが寝言で呟くその言葉はどれにも当てはまらないとか。

一体どんな夢を見ているのか。

不思議に思つてそつとは言わず、何度かダットに夢のことを聞いてみたけれど覚えてないと首を振られた。

そして、十歳を迎えて事件は起こつた。

家中で、ダットとわたしは不注意からひつかりぶつかつてしまつたのだ。

その結果、ダットは後頭部を強打。

わたしはダットの体の上に馬乗り状態。

ダットの目は中空を見つめており、焦点が合つていない状態だったから慌ててしまつた。

「やだ、ちよつ。大丈夫？」

声をかけ、顔を近づけてのぞき込むとなぜか慌てて顔を逸らされた。

そして複雑そうな顔で。

「えー。ヘイキなので。とりあえず僕の上からじつて頂けませんでしょうか？」

やたらと一寧にお願いされる。

わたしがいつもとまったく違つた言葉遣いで困惑つた。

「どうして敬語なの？」

その時はよもやあんな言葉を投げかけられるとは思つてもいなかつた。

「お姉さん、誰？」

頭が真っ白になつた。

そこから先はよく覚えていなければ、ダットをベッドに押し込んで、お医者さまを呼んで、更にガリオへ伝言を頼んで。その果ては。

「はい、君の名前は？」

「橋本誠也」

「年は？」

「二十歳」

「出身地は？」

「……日本だけど」

息子の口から飛び出したのは知らない名前、あり得ない年齢、そして聞いたこともない土地の名称。

頭が真っ白になつて、わたしは泣いた。

お医者さまの診断は記憶喪失。

それにもしても、奇妙な名前を名乗つていたようだつたけれど。お医者さまにもそれはわからないと言われた。

でも、わたしやガリオのことはすっかり忘れてしまつているし、自分の名前や出身地のことも全部聞いたことのない別の名称になつていたので、そうなると記憶喪失だと診断するしかないとのこと。正直、母親なのに知らない人間扱いされるのは辛い。

しかも、自警団から帰ってきたガリオにも同じような反応をするのだ。

まるで別人になつたみたいだった。

本当に、どうしていいかわからない。

頭に包帯を巻いた痛々しい姿。そして記憶の喪失。涙を堪えることなど出来ずに、泣いた。

お医者さまは、頭を打つて一時的に混乱しているだけかもしけないと何日か様子を見るように言つて帰つていった。いつ思い出すかもわからないけれど、出来るだけいつも通りの生活を。

お医者さまの指示従おう、とわたしもガリオもその夜誓つた。けれど、翌日。事態は急展開を迎える。

そう。思にも寄らない方向に。

朝起きて、夫婦でダットの部屋に入った途端いきなり頭を下げられ謝られた。

「ごめんなさい」

なぜそんな風になるのかわからなくて、ガリオと顔を見合わせる。「だ、ダット。どうして謝るの？」

「そうだぞ。なんていきなり」

なんだか嫌な予感して、緩くなつた涙腺から滴が落ちかける。するとダットが慌てて。

「違うよ。その、ちゃんと想い出したんだ。僕が父さんと母さんの子供だつてこと。だから」

「え？」

それは思つてもみない喜ぶべきことで「心配かけて」「ごめんなさい」と再び頭を下げるダットが信じられなくて、思わず問いを発していった。

「え、あ。思い、出したの？」

「じゃあ……？」

「うん。記憶喪失はおしまー」

きつぱりと断言されたその言葉にガリオと二人、顔を見合わせる。記憶喪失の終わり。

それはまさしくわたしが望んでいたダットが戻ってきたというこ

と。

わたしは喜びから今度こそ涙がこぼれ落ちさせた。
これで全部元通りなのだと思うと体が自然に動いた。ダットを抱きしめたくて、行動に移そうとしたその時。

「待て。キーラ」

ガリオがわたしの前に立ちふさがった。

「喜ぶのはまだ早い。ちょっとは疑え」

「ガリオ？」

彼が一体何を言つているのかわからず、わたしはただガリオを見上げるしかなかつた。

「……見た目に騙されるなよ。どうもおかしい」
そう言つとわたしの視界から、ダットを隠してしまった。

なに？ どういうことなの？

ガリオは冗談でこういうことをする人ではない。

それがわかるから余計に混乱した。

「剣を持つてくるべきだったか」「
「ちょっと！？」

「ガリオ！」

物々しい雰囲気を纏い始めた夫をわたしは信じられない思いで見つめた。

何が起こっているのか理解できない。ただ、夫が子どもに剣を向けようとしたことだけはわかる。

その口調は冗談でなく、本気だ。

「父さん、僕魔物じやないよ」

「ふん。証明が出来ると？」

状況を飲み込めないわたし一人を置いて、一人は向き合ひ言葉を交わす。それも最も最悪な方向に、だ。

魔物。

この世界で最も危険で最悪な存在。
どうしてここで魔物なんて名称ができるのだろう。

待つて。ガリオ。それはどういうこと？

答えを知っているのに、それを出すことが出来ないのはそれを考
えたくないから。

そんな殺伐とした空間に風を入れたのはダットだった。

「十日くらい前だつて」

笑いを含んだ明るい声が部屋を巡る。

「旅の傭兵の色っぽいお姉さんにチューされてたよね。確か「

「え……？」

空気が変わった。

ダットが見上げているのはガリオで、ガリオの気配が戸惑つたも
のに変化した。

「お、おい待て」

ガリオが慌てて首を振る。

わたしはふと、ガリオを見上げる。顔色がおかしい。

何かおかしい。

たつた今ダットの口からもたらされた情報にわたしは疑問を覚え
た。

旅の傭兵の色っぽいお姉さん？ しかもチュー。

何ソレ。わたし知らないんだけど。

「僕が見てるの知つて、慌てて離れてたけど。母さんに内緒だつて
飴買ってくれなかつたっけ？」

「わ、馬鹿。ダット！？」

ガリオの態度が明らかにおかしい。

「…………ガリオ？」

どうということかしら。説明が欲しいわ。

旅の傭兵の色っぽいお姉さんと何を話してたのか教えて？

そんな気持ちを込めてガリオを見上げたら、泣く子も黙る厳つい
大男が面白いくらい顔面蒼白になっていた。

ええ。もちろんしつかり説明を聞かせてもらいました。

昔取つた杵柄で助言したらお礼にキスされたとか。

それをダットが目撃して、内緒にするようお願いした?

ふふふふ。

素直に言えば少し嫉妬するくらいで済んだのに、息子に秘密にするようお願いするなんて何かやましいことがあつたとしか思えない。

当然その辺りもきつちり説明させました。

話が思い切り脱線したことに気が付いたのは、ガリオが愛玩用の獣のように部屋の隅で縮み上がってから。

そしてこの件がもしかしたらダットがわたしたちを気遣つて出した話題だったのかも知れないと思つたのは、全ての話を聞き終わつてからだつた。

その後も話は続いた。

ガリオはどうやらダットを【魔物憑き】ではないかと疑つてかかっていたようで、わたしはそれを聞いた途端背筋が凍つた。

【魔物憑き】の逸話は搜せばいくらでも出てくる悲劇の話だ。

そうなつた時点で憑かれた人間は死ぬ。

そしてその体は【精氣】を求める魔物によつて操られ、その身を滅ぼされるまで彷徨い続ける。

ダットの記憶喪失がもしその結果だつたら?

それを考へると肝が冷えたが、ガリオが確認して違うと知れた。よかつた、と胸をなで下ろしたのも束の間。

ダットの口から漏れた言葉の数々は一概には信じがたいものばか

りだった。

「僕はね。前世の記憶があるんだ」

「一体何を言っているのか最初はまったくわからなかつた。

多分、ガリオも同じだつたはず。

「前、世？」

「あ、そういうの。こっちではわかるのかな」

「それは生まれ変わり、というやつか？ 人は死ぬと、ある場所へ招かれ、そしてまた人となる。確かにこの国でそんな概念があると昔聞いた覚えがある」

「流石父さん。うん。そういう認識で間違いないよ」

父と息子で話が繋がつて流れしていく。

その話ならわたしも知つていて。以前ガリオがわたしにも話してくれたことのある話題だ。でも残念ながらこの国にはそういう概念は存在しない。

少なくとも死者は死者であり甦ることはない。とされている。死んだら終わり。

これが常識で、例外があるとすればきちんと埋葬されなかつた死体の主は実態のない魔物になるという程度のもの。

だから、ガリオからその話を聞かされてもピンと来なかつたのを覚えている。

それなのに、今ここで息子のダットが自分はソレだと言つ。

「そう簡単には信じられないとは思うけど。僕は昔【橋本誠也】という名前の人間だつた。年だつて二十歳になつたばかりで、勉強してて将来は教師になるつもりだつた。でも、死んでしまつて。気が付いたら僕は父さんと母さんの子どもだつたんだ」

わたしはその話にただ口を開けているしか出来なかつたのだけれど。ガリオはちゃんとダットの話を聞いてくれていた。

「つまり、お前はその前世の記憶がある、と？」

「うん。そう。僕は【ダット】以外にもう一つ【橋本誠也】っていう記憶を持つてる。最もそっちの方は完全に過去の話で、今はちや

んと父さんと母さんの息子の【ダット】だよ。前世の記憶戻っちゃつたからしゃべり方はこんなだけだ」「

あ、と思わず声に出す。

そこでやつとわたしはダットが今までのダットではないところに気が付くことが出来た。

本当ならもっと早く気付いてもいいはずだったのに。

いや、本当は気付いていた。

今ダットの話の中に出でてきた名前は、ダットが記憶喪失になつた直後に出できた名前だ。

困惑して、混乱して、泣いてばかりだつたために判断力が鈍つていたのだろう。

ようやく繋がった。

冷静になつてよくよく見てみれば、以前と違つ表情なのはすぐには気付けたはずなのに。

大人のように見えて子どものような顔にもなる。不思議な雰囲気がダットの周囲には満ちていた。

それは以前からダットがしていた表情にもよく似ていて、わたしはそうかと頷いた。

ダットが他の子どもたちと違つっていた理由はこれだつたのだ。

「まさかこんな風に記憶が戻るとは思つてなかつた」

少しだけ目を伏せて微笑むその顔は、大人の顔。

ダットの言つことが全て真実なら、一体彼はどんな人生を送つてきたのだろう。そうしてなぜ死んだのだろう。

そう考えたら、聞かずにはいられなかつた。

「以前いたところは、どんなところだつたの？」

「あ、多分こことは全く違う世界かな」

ダットは少し懐かしそうに語り出した。

「全く違う世界？」

「そつ。魔法なんて存在しないし、魔物もいない。そんな世界だつたよ」

なんてことだろう。

全く予想していなかつた言葉が飛び出して、わたしもガリオも声が出せなかつた。

魔法も魔物もわたしたちにとつてはとても身近で危険なものだ。それが、ない。

だとしたらそこは安全に暮らせるいい場所だといつことにならないだろうか。
そんなところにいたのに、ダットは二十歳という若さで死んだと言つた。

一体どんな状況だったのだろう。

病気だつたのか、それともそんな平和な世界でも殺伐とした殺し合いが存在していてそれに参加していたのか。考えればきりがない。

ダットの話は続く。

「代わりに機械つていう、魔法の代わりみたいな便利なものがあるんだ。人間の手助けをしてくれる道具つてところかな。そういうのを作る専門職もあつたりして」

それは道具を作る職人さんみたいなものかしら。

そう尋ねると似たようなものだと頷かれた。

「でも、さつきも言つたけど僕はその中で教師になりたくて勉強してたんだ。だけど多分、運が悪かつたんだと思う。学費を稼ぐためにバイトしてたんだけど。帰りが大雨で、雷も凄く鳴つてた。傘を差しても全身が濡れるくらいに降つてたから、雨宿りして帰ろうと思つて道歩いてたら、転けちゃって」

ははは、と恥ずかしそうにダットは笑う。

そして全く持つてわたしたちが思いも寄らない言葉を言い放つた。

「多分、その時頭を打つて死んだんだと思つんだ」

それは完全に、予想の斜め上からの言葉だった。
頭を打つて死んだ？

わたしは呆然とし、ガリオもまた呆気にとられた顔で固まつてい
た。

けれどダットはそれには気が付いていない様子で。

「だから結局教師にはなれなかつたんだけど。次に気が付いたらこの姿だつたんだ。頭を打つて死んだのに、今度は頭を打つて記憶が戻るなんて。そこは偶然なんだろうとは思うけどちょっと驚いた」

それはそうかもしれないけれど。

なんだか神妙に聞いていたわたしたちが馬鹿に思えてきて、少し頭が痛くなつた。

まさか、死んだ理由がそんなことだったなんて。

「「はあ」」

示し合わせたかのように、ガリオとわたしのため息がかち合ひつ。

なんてことだらう。

そこでようやくダットは戸惑つたようにわたしたちを交互に見た。これはわかつていらない態度に違ひない。

その様子が年相応の子どもに見えるので、それに少し安心しつつも。

「なんだか、心配して損をした気分なのはなぜかしら」

「あれだけ氣を遣つて来た原因が『レとはなあ』

遠くを眺め、何かに思いをはせる切ない姿。

アレを見て散々やきもきしていたといふのに、死んだといふ理由が『転けて頭を打つたら』なんて拍子抜けもいいところだ。

「え、と。父さん。母さん？」

恐る恐る、といった感じにダットが声をかけてくる。

まるで、ついさっき見たばかりのガリオのようなその態度にわたしは思わず「流石は父子」と少しばかり見当外れな感想をつけた。
「今のは、わかつてて言つてる?」

ダットの言いたいことはわかる。これでも母親だもの。例え「前

世の記憶が戻りました」なんてことがあっても息子の不安げな表情は以前とそう変わらない。

ダットが打ち明けた話の内容だつて、決して軽いものではないことも頭ではわかってる。

でも。

「そうね。正直なところ、まだ戸惑っているんだけど」

「ああ。信じられんと思つところもないわけじゃない。だがなあ」

「ねえ」

その最も重要な部分がつっかり『転けて頭を打つた』では格好がつかない。

ガリオと顔を見合させ、お互に頷き合つ。

「だつて、ね。前世なんて言つからてつきり女性を巡つて命を懸けた決闘があつたとか」

「戦場で華々しく散つたとかそういう話じゃないかと期待してたんだが」

「「雨の日に滑つて転んで頭打つたじゃなあ（ねえ）」」

語尾は違つたけど、見事にわたしたちのぼやきは重なつた。
そしてそれは続く。

「「うちの子はそんなに間抜けだつたのかと思つと……はあ」」

もちろん最後のため息まで一緒に。

ダットはなんだか落ち込んでいる様子だつたけれど、仕方ないわよね。これがわたしたちが感じた正直な感想なんだから。

あれだけ不安で仕方がなかつたのに、今はなんだかおかしくて仕方ない。

そこにダットのお腹の無視が鳴つて、自然と笑みが浮かんだ。

そうしてわたしたちはダットの部屋を出た。

ダットの部屋は一階。

わたしは朝食の準備のため、一階の台所へ。ガリオも自警団用の装備は一階に用意してあるので一緒に階段を下る。

けれど、和やかに済ませられたのはここまでだった。いつも生活が戻ってきたような気がしていたけれど、あることには気が付いたのだ。

にわかには信じがたい話を聞いて、でも嘘とは思えなくて、その中身にちょっと拍子抜けして。

それを真実と認めるなら、多分わたしたちには覚悟が必要になる。

「ねえ。ガリオ」

「うん？」

「大丈夫、よね。あの子」

明らかに他の人間とは違う。その特殊さを背負つてわたしたちの息子はこれからこの世界で生きて行かなくてはならない。

ダットはただでさえ他の子どもたちとは一線を画した雰囲気を持つている子どもだった。

他の子どもたちもそれは察していたようで、ダットの友人と言える存在は現在でもたつた一人だけ。

それも子どもらしい部分があつたからこそその関係が保てていたわけだ。「記憶を取り戻した」というあの状態は、その一人の友人すら遠ざけてしまうかもしれない。

けれど、それだけならまだいい。

ガリオが疑つたように『魔物憑き』だと思われる可能性もある。もしそう呼ばれたとき、わたしはちゃんとダットを守れるだろうか。

以前のダットに対してでさえ抱きしめる以外のことは出来なかつたのに、実際にそつなつてしまつたとき、わたしにはそう出来る自信がなかつた。

「……キーラ。俺たちが出来ることは今までと同じだ。あの子の側で、あの子を支える。それだけさ」

「でも」

「大丈夫だ。あの子だってわかっている。それに、俺たちがその理解者になればあの子の負担はきっと軽くしてやれるさ。そう信じよう」

ガリオの鍛えられた大きな手が伸びて、頬に触れる。

「大丈夫だ」

髪に覆われた厳ついと評される顔に笑みが浮かぶ。そのままわたしの顔の位置にガリオの瞳が降りてきて、わたしは静かに目を閉じた。

どうか、ダットに祝福がありますように。

唇に愛しいその人を感じて、わたしはただそう願った。

魔法の勉強をしてみた、の巻

両親に自分の秘密を暴露した翌日。

最低でもあと三日間は安静に。

往診にやつてきた医者はそう言つて去つていった。

頭の包帯は……まだ取っちゃ駄目だとか。

まあ、痛みもまだあるし、大きなこぶがまだまだ存在感を露わにしている状態だつたりするから仕方ないかもしれない。

それに下手に動くと母さんに泣かれるし。

一度、寝てばかりじや体が鈍ると言つたら盛大に怒られた。

お願いだから安静に、と母さんに涙を浮かべられたら逆らえない。

そんな僕に出来ることはベッドの上で大人しく本を読むことぐらいで、だつたらと手にしたのは記憶喪失中に一度目を通した【魔法基礎読本】だつた。

魔法に関する基礎的な知識や、初步的な魔法が、あくまでも子ども向けの挿絵つきで書かれている代物だ。

あの時は適当に読み物として貞を捲つただけで、まさか覚えられるとは思わなかつた。

だからちょっと感慨深くなるのも当然で。

もし僕がゲーム一気質だつたりしたならばきっと狂喜乱舞していたと思う。

ま、生憎そこまででもないんだけど。

苦笑いを浮かべつつ、興味半分で表紙を開く。

一度は目を通しているので目次を飛ばし、高速【魔法を使うのに必要な物】と書いてある頁を開いた。

そこには魔法を使うのに必要とされるものが絵付きで三つ書かれている。

一つ目は【人の身に宿る魔力】。

これは空氣中に存在する【魔素】と呼ばれる目に見えない粒子が人間の体内に入ることによって、発生するものらしい。

まずそれありき、なので魔法を使おうとする者が最初にするのはこの魔素を体内に取り込む練習だ。

が、ここで要注意。

魔法を使用するためにはそのための適正が必要で、これがないと最初の一歩も踏み出せない。

僕が住むカーライルという町では十歳になると無償でその判定をしてもらえることになっていて、その判定で適正があると判断されれば【魔法基礎読本】が自動的に貸し出され、魔法の練習をすることが許される。

つまり今この本を読んでいる僕には魔法使いになる適正があるってわけだ。

二つ目。

次に必要とされるのは魔力とは切っても切れない関係にある【魔素】と呼ばれるもの。

これに関しては前述した通りで【魔力の元】として知られている。空氣中に大量に存在しているので呼吸するだけで少量ずつ体内に取り込まれ、適正がある人間ならば自動的に魔力に変換されるそうだ。

ちなみに適正がない人間の場合は、魔素は魔素のまま体外に排出されるとか。

これはうちの両親が該当する。
そして三つ目。

最後の一つは【魔導具】。

魔素が結晶化した石【魔鉱石】に制御を示す【紋章】を刻みつけ加工したもので、魔法の方向性や威力を定めることを容易にし、魔法が使いやすくなる魔法のための補助器具だ。

ただし。

あくまでもこれは補助器具であり、実は【魔導具】がなくても魔法は発動する。

じゃあ、どうして【魔導具】が必要、とかれているのかといつと。

魔法の成功率を上げ、魔法の失敗や暴走、暴発を防ぐため。

これに尽きる。

ゲームだとカーソルで設定してあつさり魔法は発動するけれど、現実はそうはいかないみたいだ。

使う魔法に込める魔力を決め、方向性を定め、そして制御する。この工程を経て、更に必要な【呪文】を加えることで魔法というものは形を為す。

だからそれらを愈ると魔法そのものが不安定なものとなり、発動しない場合もあるが時に暴走や暴発という結果にも繋がる。とのこと。

特に魔法を覚えたての初心者は危険で、うっかり魔法のさじ加減を間違えたために危うく死にかけた。なんて話もあるらしい。

【魔導具】はそれを防ぐためにあると言つても過言ぢゃない。

まあ、魔法使つて大怪我なんて洒落にならないから「【魔導具】なんて必要ない」って言つような強者はいないと思うけど。多分。僕もそんなのは「めんだから、【魔導具】はちゃんと持つている。」といつか、この【魔法基礎読本】を貸し出された時点で両親が首飾りの形のものを買ってくれた。

今のところまだ使用する予定はないので、勉強机の引き出しの中にしまっている。

「ダット。いい?」

母さんの僕を呼ぶ声と扉を叩く音が重なる。

「なに、母さん」

本を開いたまま返事をすると、扉が開いて母さんが少し困ったような顔を覗かせた。

「ライナちゃんとエイリクスくんがお見舞いに来てくれるけど。
どうする？」

それは【ダット】の幼馴染み兼友人の名で。

「あー」

母さんの表情は曇りがちだ。

理由もわかる。

僕が前世を思い出しちゃつてるから、引き合わせるのに不安があるんだろうなあ。

その心配も当然のことだ。

僕はもう前の僕じゃない。

だから、以前の僕を知る人はいきなり変わってしまった僕に戸惑うだろうし、下手をしたら父さんが最初に感じたように【魔物憑き】だと怖がられるかもしれない。

だったら前の僕のように振る舞えればいいとも思うけど、それだとどこかでボロが出て結局は駄目になりそうな予感がある。

そうやって相手を混乱させるより、最初から堂々としていた方が僕も気が楽になるというものだ。

流石に父さんや母さんに話したような内容をそのまま言つわけにはいかないから、多少ごまかしたりはすると思うけど。

「まだ具合が悪いから、って言つて帰つてもらひ?」

「ううん。それはいいよ。会う

「でも……」

「どうせ、このままつと会わないわけにもいかないでしょ。適当に合わせてこまかすよ。だから平気」

賽は投げられた。

なんて格好つけても仕方ないんだけど、気持ち的にはそんな感じだ。

「心配してくれてありがとう」

お礼を言つと「無理しないでね」と抱きしめられた。

「うん」

ふわりと薫る花のような匂いが、心を落ち着かせてくれる。

「じゃあ、行くわね」

待ち人がいるからか、母さんの抱擁はすぐに終わった。

静かに扉が閉まり、僕は一つ深呼吸する。

あとはもうなるようになれ、だ。

騒がしくなるだろうこの部屋の近い未来。それを思つて僕は顔を

引き締めた。

幼馴染み、襲来

「よひ、ダット。来てやつたぞ！」

格好つけ氣味の少年の声と共にその扉は勢いよく開かれた。
天井へ向けて真つ直ぐ向いた赤い髪が跳ねる。

四方を白っぽい煉瓦に囲まれた室内が一気に鮮やかさを増し、続
けてこれまた華やかな銀髪の癖つ毛の束が二つ。色を添えた。

「ちよつ。このばかエリク！ ダットは病人なんだから、静かにし
ないとだめなのよ！」

赤と銀。

その二つは賑やかに僕の元へやつてきた。
更にその後ろには金色が控えていて、彼女は苦笑すると「あまり
騒がないようにね」と注意だけして去つていった。

ごめん、母さん。この一人にそれは無理。

「ダット。あたま打つてきおくそーしつとか聞いたけどヘイキか？」
母さんがいなくなつた途端、赤い髪のエイリクス、通称エリクが
ベッドの上に乗り上げてきた。しかも自分で聞いておいて返事も聞
かないうちに。

「お、ホータイまいてんの？ どこ打つたって？」

更に質問を重ねてくるので落ち着かない。

それを咎めるのは銀の髪の少女。ライナの役目。

「ちよつとエリク。病人のベッドに登らないの！ ダットがゆつく
り休めないでしょ」

エリクの襟首を掴むとそのまま引っ張り、床に引きずり落とす。

二人は同じくらいの体格なので、難なくそれは成功した。

「いでつ

鈍い音と共に、エリクがお尻から床に落ちる。

一応マットを敷いてるけどその下は石だから、痛いだろ？なあ。

「な、なにすんだよ。」のぼーりょく女！

お尻をさすりながらエリクがライナを睨みつける。

「あんたがダットのベッドに座るからでしょ。ダットは病人。ベッドの上で騒ぐなら帰んなさい」

ぎるり、とライナもまた目を細くする。

いつも通りの展開。

僕は、僕を放り出して睨み合ひを始めてしまった二人を見てこいつりため息を吐く。

どうしてかこの二人、非常に仲が悪い。

顔を合わせると何かにつけて言い合ひになる言ひなれば、犬猿の仲。

だつたら一緒にいなければいいのだけれど、気がついたら一緒にいる。

そしてひたすらこれの繰り返し。

「別にいいだろ。それぐらい」

「よくない！ あんたつてばいつもそうやってダットを振り回してるじゃない」

「あー？ おまえだつてそーだろ。ダットがおとなしいからってあねき風吹かせてさあ。だからダットがつよくなれねーんだよ！」

「はあ？ なに言つてんのよ。ダットはエリクみたいにガキ大将じやないの。あんたみたいになれるわけないでしょ」

「だからつて女に守られるのがふつーじゃねえだろつ。だーかーら、オレがきたえてやろううつとしてるんじやん」

「あんたの鍛えるは危ないのばつかでしょ。ダットにケガさせる気！？」

「ケガぐらいどーだつていいつての。父ちゃんが子どものつちせそれが男の勲章だつて言つてたぞ」

「それはあんたの家の場合でしょ。ダットはねえ、あんたみたいに

丈夫じゃないんだから！」

僕が口を挟む間もない。

「だから、丈夫になるためにいつもさそつてやってんだ。男がひょろひょろじやカツコつかねーだろ」

「あのね。男がみんなあんたみたいな人間なわけないじゃない。ダットはキーラおばさんに似て細いの。センサイなんだって、うちのお母さんが言つてたわ。だから」

「は？　だからなんなわけ。おまえこそ女のくせにいつも人をボコボコなぐりやがつて」

「なつ。それはあんたがいつも失礼なこと言つからでしょ！」

「バカ言つなつ。ホントのこと言つてるだけだろーが！」

終わりそうないな。この口喧嘩。

根つこのとこ原因が僕なだけに、僕が止めるのが筋なんだろうけど。下手に割り込むのもキケンな気がするんだよね。だからって放置しておくるのもその後が怖いんだけど。

ほら、だつてもう一人とも握り拳作つてるし。

今にもお互い飛びかかりそうな雰囲気……

「それが失礼だつて言つてるのよ！」

思つた側からライナの腕が飛び跳ねた。

あ、ヤバイ。実力行使

が、救いの主はいるものである。

ノックもなしに部屋の扉が勢いよく開き。

「ライナちゃん！　エイリクスくん！」

エリクの脳天にライナの拳が打ち付けられるはずだつた所に、鋭く切り込んできたのはウチのお母さま。

思わずエリクもライナもそして僕も、開け放たれた扉の向こう側を凝視した。

その目を見て、僕の脳裏を過ぎたのは【鬼】といつも這樣。

あー、なんかヤバイ。目が据わってる。

いつもここにこしてゐるか、泣きそうにしてるかどつちかの印象が
強いけど、実は一家最強の看板を背負つのはこの人だ。

力自慢で厳つい顔の父でさえ、簡単に尻に敷いてしまう。
今の彼女の顔は、父を尻に敷く時に見せるものに近い。

そう。先日の時のような、である。

「……あ。キーラ、おば、さん？」

ライナが腕を振り上げたまま固まり、エリクもなんだか扉の方向
を振り向いたまま静止。

多分だけど、普段と違つ母さんに驚いているんだと思つ。

「ふふふ。ライナちゃん。エイリクスくん」

にこ、と母さんが笑う。

ただし田は笑つてないけど。

ここにエフェクトなんてものがあつたら、きっと母さんの背後か
らは黒い何かが出ていたに違いない。

それぐらいに怖い。怖すぎる。

母さんの視線が向けられていらない息子の僕から見ても迫力ありすぎ
ぎだった。

「わたし、ちつきなんて言つたかしら？」

びくつ、と一人の肩が震える。

「ダットは今、ケガをしていて安静にしていなくちゃダメなのよ？
だから……」

母さんが一步、部屋の中に踏み入つた瞬間だった。
みしり。

僕は確かに床板が軋む音を聞いた。

それはまるで死刑宣告の前触れのようで。

「「「」」」めんなさい……」

..... そうなるよな。

正義（？）の女神さまに少年少女は平伏するのでした。

あらためまして幼馴染み

嵐が去った。

いや、まだ幾分は残っているけど、少なくとも直前よりはずっとマシな状態だと思う。

最初に来た時よりも幾分縮んだのではないかと思える赤と銀の二人は、母さんが用意したイスに大人しく座っていた。

居心地が悪そうに見えるのは多分母さんのせいだ。

母さんが部屋を出て行ってから、ずっと落ち着かない様子でちらちらと扉の方向を横目で見ている。また騒いだら即、あの状態の母さんが出てくるとも思つていいんだろう。

「え、ど。一人とも？」

だんまりが続いたので、僕の方から話しかけると。

「お、おう！」

「な、なに？」

おっかなびっくりで返事をされた。

……トラウマになつてなきゃこいいけど。

そんなことを考えつつ、僕は改めて一人に話しかける。

「そんなに怯えなくても、普通に話をするだけなら母さんも怒らないよ？」

「けど、な」

やはり気になるようで、エリクがまた扉に視線を送る。

「どうしたの？ いつもならこいつ、だからなんだ。って顔なのに」

「ばつ。おまえ。おばさん相当怒つてじやん。父ちゃんにしぼられるよか」えーよ

「やうよつ。キーラおばさんがあんなに怖いなんてはじめてだわつ

エリクが焦つた表情で、ライナもまたそれに準じた様子で声を出

す。

「うーん。確かにそうだけど、静かにしてれば平気じゃないかな」
さつきのは完全に行きすぎていたと判断されたために起きたこと
だから、普通にしていればあとは何も言われないはず。

なんだけど。

「ごめんね、ダット。このバカのせいで騒いだりしたから」

「ああ？ 誰がバカだつて？」

何かとかみ合わない二人が一緒にいる以上それは無理かもしけな
い。

エリクの目が鋭くなり、それに合わせてライナの目もまた細くな
る。既に一人の瞳には剣呑さが見え隠れしており、一触即発の状態
と言えた。

まったく。せっかく消えた火をまた付けるなんて。

流石にもう一度あれをやると今度こそ母は【鬼】と化し、実力行
使に出るだろう。

そうなったとき、果たしてこの一人が再起できるかどうか疑問だ。

「あー、もうつ。そこまで！」

呆れと諦めの感情を絡めたため息が、言葉と同時に飛び出していく。

「エリクもライナも、僕そっちのけで喧嘩しない。そもそも目的
からズレすぎだろ」

一人が目を丸くして僕を見た。

多分いつもだつたらしない言動に驚いているんだろうけど、まづ
は喧嘩の再発は防ぐのが優先事項だ。

「ここには僕しかいないからいいけど、もし病院とかだったらさつ
きので追い出されてるよ。もう少し時と場合を考えて行動できない
？」

そもそもなんでそんな仲が悪いのに一緒に見舞いに行くのか、
そこがわからない。

母さんじゃないけど、呆れたくなるというのだ。

喧嘩をするために僕の来たのではないと信じたいが……
そんな二人を交互に睨むように見れば。

「ダット……？」

「おまえ？」

共に奇妙なモノを見たと言わんばかりの顔で硬直していた。
うん。まあそうだろうね。

以前の【ダット（僕）】はこんな時オロオロと一人を見るのが精一杯で、一人が自然と喧嘩をやめるまでドキドキしながら待つてるのが常だった。

人見知りも激しくて、人の顔を見るのも苦手で。

そんな内向的な性格の代表みたいな人間が、いきなり喧嘩に割つて入つて説教までし始めれば驚くのも当然だ。

「どうしよう。ダットが変」

どこか青ざめたライナの独白が耳に届く。

「ちょっと、まさかエリクのせい？」

頭を抱えるライナに、エリクが「じょうだんじやない」と応じた。

二人は顔を付き合わせて小声で口論し始める。

「なんでもまたオレのせいになんだよ。おまえのせいじやねーの？」

「ちょ、バカ言わないでよ。そんなわけないじゃない」

「じゃ、頭打つたせいだろ。きおくそーしつらしいし。それでおかしくなったんじやね？」

ちらりと僕の方に寄せられる視線が二つ。

色々と勝手に想像しているだろうことが、その様子からも見て取れる。

「でも、だからっておかしいわよ。ダットよ。あのダットがよ。あんなしゃべり方するなんて絶対に変」

「あー、まあ そうかもだけどよ。前に父ちゃんがきおくそーしつでせーかく変わつたりすることもあるって言つてたぞ」

「でも変でしょ。あんな別人みたいなしゃべり方つ。どう考えたつてダットじゃないわ」

君たち。全部聞えてるんですけど？

「二人とも」

声をかけたらびくつ、と一人が肩を震わせた。ゆっくりと一つの顔が同時に僕の方を向く。

何か見てはいけないものを見てしまったという雰囲気に、僕は再びため息をついた。

「言いたい放題してるけど、僕の話を聞く気ある？」

「え」

「あ」

なんとも間抜けな顔で固まる一人。

「簡単に、だけど説明するよ。僕の性格がどうして変わったのか知りたいんでしょ」

この二人相手ならまどろっこしく考えるよりもはっきり喋った方が伝わりやすい。

ただ、やはり前世うんぬんは伏せるのは決定だ。

完全におかしい人に見られるだろうし、説明してもうまく伝わるかわからない。

父さんや母さんに話せたのは、ごまかすのは難しいっていうのももちろんあつたんだけど、一番の理由は彼らが大人で両親だったから。

でも今日の前にいるのは【ダット】よりも一つ、二つ年上なだけの少年少女なわけで、彼らに両親にしたのと同じ説明をしたところで理解されるかどうか……

ひとまずは彼らが納得できるような言い訳があれば、それで大丈夫だろ？

僕の提案を受けたエリクとライナが顔を見合わせるところにちなく頷いた。

それを確認すると僕は当たり障りのないように言葉を選んで形にする。

「僕の性格が変わった理由はエリクが言つてた通り、かな」

「それって、きおくそーしつになつたからつてことか？」

「多分ね。でも、記憶喪失はもうよくなつたし、記憶の混乱もないよ。ただ、記憶喪失だったときの性格がそのまま残っちゃつたみたいなんだ」

「……そんなこと、あるの？」

ライナが真っ直ぐ疑惑の眼を僕に向ける。

彼女は頭がいいから、下手な言い訳では説得できない。けれど、強引に押し通すことが出来れば多少の疑問は残つてもなんとかなるはず。

「僕にもそのあたりのことはよくわからない。気がついたらこうだつたしね。それ以外に説明のしようがないんだ。僕だつてまさかこんなことになるとは思わなかつたし」

そもそも生まれ変わりなんでものが実際に起つことは予想外だし、予定外だ。

しかも異世界なんていう全く別の次元に来てしまつなんて、僕にも理解不能な出来事でしかない。

だから何かを見極めようといつ表情のライナの視線は非常に困る。「あやしい」

「おま……ライナ。ダットがそう言つてんだからそつなんだろ。別にいいじゃん」

一方のエリクはそんなライナを面倒くさそうに見て肩を落とす。「ダットはダットだろ」

「そうかもしけないけど」

納得いかない顔で、僕を見たライナは「もついい」とそっぽを向いた。

その後は僕を窺うように見ては目を逸らし、会話にもあまり加わらず。おかげで追い出されるような騒ぎはなかつたのだけれど。

面倒なことになりそうな予感に、僕はこつそりため息をついた。

魔法の道は一日にしてならぬ！

実のところ、この世界での文字普及率はあまり高くない。らしい。小さな村では村長以外誰も文字の読み書きが出来ないなんてことも珍しくないし、下手をすると誰も文字を知らないという日本では考えられないような村もあるみたいだ。

とはいって、村や町の規模が大きくなればそもそも言つていられない。大きな町では文字看板もあるし、無償で文字を教えて貰える場所もいくつかは存在していて、必要ならそこで学び、それ以上のことを学びたいなら国や領主が運営する学校へ行くというの主流とのこと。それには一般庶民が目の飛び出るような金銭が関わってくるから、余程のことがない限り日常生活を送れる程度の文字や簡単な計算を学んで終わり、といつ感じらしきけど。

ただ、やはりそれは地域事情によって若干異なるようで。カーライルはこの近隣を治める領主の方針もあって、識字率が他の町より高い。

領主が独自に無償の学校を開設していて、誰でも自由に文字や学問を学べるようにしているからだ。

理由は色々とあるようだけれど、一番の理由は魔法。

カーライルの西方には未だ人間が踏み入り難い魔物の領域が存在していて、町の外壁を一步出ればそこはもう危険地帯。町の周辺にはそれほど危険な魔物の縄張りはないが、西方にある山脈に近づけば近づくほど危険度は増していく。一応は境界線として砦が設けられているが、あくまでも境界線だ。完全に魔物の侵入を防げるわけでもなく、それを軽く飛び越えてやつてくる魔物もいる為、油断は出来ない。

しかも、武具のみで倒せる魔物だけではないので魔法の需要は高かつたりするのだけれど、実際に魔法を使える人材はそう多くない。国によつて差はあるが、ジードリクス王国での魔法使いの割合は三人に一人程度。充分に補える人数に見えるが、それを戦場に立てるくらいまで昇華できる人間はほんの一握りしかいない。

だからこそ、早期にそういう人材を確保できるようにカーライルでは十歳になる子どもに対して魔法使いの素養があるか判定を行い、適正があれば魔法使いとしての指導を行うことにしているらしい。

ちなみに、僕に貸し出された【魔法基礎読本】はこここの備品で、用が済めば返却することになつてている。

まあ、【魔法基礎読本】だけではなくて他の教科書類もそうなんだけど。

経費節減というか、リサイクルというか、紙の供給量があまり多くないのも要因か。

現在学校に通う生徒数は一百人弱。完全に自由登校なので日々によつて人数は異なる。

年齢層は大抵が五歳から十四歳だつたが、それ以外でも五十代の孫がいるという人間が字を覚えたいと通つていて、魔法の基本を抑えたいという旅人が来たりする。

教室もそれぞれ大体の年齢層別になつていて、覚えたい事柄のみを選択して勉強することも可能なので大人から子どもまで様々な年齢の人間が同じ教室に座ることもあつた。

【基礎魔法学】の授業はまさにその代表格と言えるかもしけない。

学業復帰初日。

学校の敷地内に設けられた訓練場。まるで体育館のような広さの場所に【魔法基礎読本】を手にした子どもと大人、四十人程度が集まつてゐる。

当然その中に僕も含まれてゐるわけだけど。

その中心にいるのは本を持たない三人の大人たちで、それぞれが

【魔導具】を手にした魔法使い兼教師。

「はーい。じゃあ、今日の授業を始めるわよ」

最初の声かけをしたのは金髪碧眼の女性だった。緑色のワンピースの上にショールを羽織った姿がとても絵になつていて、明るく、人懐っこい性格なので、大人から子どもまで人気がある教師だつた。「まずは魔素を集める訓練ね。それから組み分けして、それぞれに合った練習をするから。わたしとフェイ儿先生。サイラ先生に見てもらつて合格が出るまで待機してください」

並んで、という指示に従つて生徒が三列にまつすぐ並ぶ。一列ずつ一人の教師が見るためだ。

子どもは素直だから素早い。あつという間に並んでしまう。
僕も遅れない程度にそれに習つた。

一方、そんな子どもたちの中に混ざるほかない数人の大人たちの行動はゆっくりだつた。しかも体格が違うからそれが目立つ。更に魔法を学びたいのは山々だが、子どもの中に混ざるのはちょっと。という顔を隠さないので子どもに敬遠される。そしてまた目立つ。悪目立ちしてゐる感じか。

まあ、そんな大人ばかりじゃないわけだけど。

並ぶのが遅れた大人は一番後ろに回るので時間がかかつたが、順番的には前からだし、教師陣はその辺り慣れているので問題ない。「魔素を集める段階では【魔導具】を意識する必要はないわ。ただ、息をしつかり吸つて吐く。自分の周囲にある空気を意識して。目に見えないからわかり辛いけれど、ちゃんと感じられるはずよ。それを自分の中へ引き込むよう想像するの」

初心者向けの説明をしながら、教師たちは前から後ろへ一人一人の状態を見していく。

慣れない人間には無理だが、長年魔法に携わってきた彼らのような教師だと見ただけで魔素や魔力の流れが見えるらしい。

ただ、それにも才能が必要らしいけど。

「ラウチさんは、もう少し肩の力を抜いてみて。今の状態は取り込

むじやなくて弾くになっちゃつてるから。アーヴィルくんはひょりと慌てすぎかな。もう少ししゃつくりと。それだと魔法を使うときこそ失敗しやすくなるよ。自分をちゃんと制御できなきゃ駄目。スーリくんは……うん。流石だね。前よりずっとよくなつてる。この調子で頑張って」

的確にそれぞれの注意点を見いだし、指摘していく。
後ろの方に陣取つた僕まではまだかかりそつたが、僕がこの授業で実技を受けるのは今日が初めて。
頭を打つて休んでいた間に何度も本を読み返したもの、実践はまだだつた。

ほんとうにベッドから動かないまま数日を過ぎたわけだから、ちよつとはそういうのをしてよかつたんだらうけど。
ていうか、試したけどさ。

魔素を集めて魔力に変換つてのが全くわからなかつたんですね。これが。

誰かに聞こえにもうちの両親は魔法使えないし。
こんな感じで魔法を使えるようになるんだろうか。ってホントに思つたし。

胸にさげた【魔導具】を見下ろすとついついため息が出てしまつ。でも、ここで悩んでいても仕方ない。

「はい、次」

顔を上げると金髪碧眼の教師の姿がそこにあつた。
おつと。もう順番が来たのか。

思つたよりも早く順番が回つてきちらしく僕は慌ててしまつたが、
彼女の方はそんな僕を笑顔で見下ろす。
それは母の笑みによく似ていて。

「ダット。待つてたわよ」

「シェリナ叔母さん」

実際、母さんの妹なわけなんだけも。

母さんよりも五つ年下だという彼女はまだ二十三歳と若い。十五

歳の時から別の国の魔法学校に留学、三年前に帰ってきた実力者で、現在は自警団とこの学校の教師を掛け持ちしている。

「元気そうね」

右手の人差し指に指輪型の【魔導具】をはめた彼女は視線を僕の位置に合わせると頭をそつと撫でてきた。

「頭を打ったって聞いてちょっと心配していたんだけれど」「あ、うん。心配かけてごめんなさい」

「あら、いいのよ。わたしこそお見舞いにいけなかつたんだもの。謝らなきや」

「そんなことは……」

なんて授業とは関係ないことを話していくと近くを通った黒髪の男性教師、フェイエル先生に睨まれた。

「シェリナ先生。授業中です」

物凄く生真面目で有名な教師で、しかも神経質。眼鏡かけたら絶対に似合つタイプだけど、生憎この先生は裸眼。受け持ちの授業がないときは領主館で秘書的なことをしているらしい。

うん。やっぱり眼鏡があつたら完璧だと思う。

でも、怒らせると面倒なことになりそうな感じ。

その辺りは叔母さんもわかっているのかすぐさま謝罪。

「あ、そうですよね。ごめんなさい」

「公私混同は困ります。そういうことは授業の合間にしてくれださい」

「うわあ。超真面目だし。

フェイエル先生はこれ見よがしに嘆息して、自分が受け持つ生徒たちに向き直った。

正直、付き合いにくい先生もある。

僕と叔母さんの間に氣まずい沈黙が降りたが、それはそれ。

「え、と。じゃあダットくん。この訓練は今日が初めてよね。わからないうことは多いと思うけどその辺りのことはちゃんと教えるから、聞きたいことがあつたら言ってね」

叔母さんも教師として生徒に教える身だ。切り替えは早かつた。
僕はそれに頷いて、説明を聞いていく。

「IJの訓練場には、通常の状態よりも魔素が集まりやすいように【紋章】を敷いているの。だから魔素を感じ取ることが苦手な子でも、比較的簡単に魔素を魔力に変換できるようになっているわ。IJIまではいい?」

「はい」

「魔素は目では見えないものなのよ。魔力もそう。でもそれを感じ取ることは出来るの。魔法を使う人間はみんなの能力を持っているわ。普段は無意識にだけれど、魔素を魔力に換えているの。でも魔法を使うにはそれを意識的にしなくてはいけない。だからまず、あなたにはそれを感じてもらうわね。わたしが見本を見せるから、よく見ていて」

叔母さんはそう言うと僕から少し離れた場所に立った。

他の生徒も気になるのか、僕と同じように叔母さんを見つめている。

「はい。これが通常の状態。魔素を取り込む前ね。そして……」
叔母さんはリラックスした表情で肩の力を抜くと両手を胸の位置に当てる息を吸い込む。

一瞬、空気が震えたのはわかったが。

「これが魔素を取り込んだ状態ね。この時点で魔素は魔力に変換されるわ」

さつきと何ら変わらない状態で言われて、僕は目を瞬かせた。
「ごめんなさい。さっぱりわかりませんでした。

それが顔に出ていたらしい。

僕の表情に気がついた叔母さんが唸る。

「もつとわかりやすくするなら、魔法を使つた方がいいかしら」「そう言つと少し考えた様子で「これはもう少しになると想つただけれど」と右手にはめた【魔導具】を示した。

「いい? 一度しかやらないわよ

やつはつと叔母さんは右手を前に差し出した。

【汚れしは墮ちし我が身。歪みしは我が心。我望む。我願う。淨化の風を吹かせたまえ】

今度はわかつた。

叔母さんが呪文を口にする度に空気が震え、叔母さんの方へ引っ張られる。そして呪文が終わった瞬間、叔母さんを中心にして風が起きた。

「暴風とは言わないが、思わず構えずにはいられない程度の勢いで。
「わっ！？」
「きやつ！」

何人かの生徒が驚いたように悲鳴を上げる。

ちょっと魔法が大きすぎたらしい。バランスを崩して倒れかけた生徒もいるようだ。

うん。僕から見てもこれはやりすぎだと思つ。

叔母さんも予想外だったみたいでちょっと慌ててるし。
そして。

「ショリナ先生！」

またもや声を挙げたのはフェイル先生だった。額に青筋が立つて、いるように見えるのは多分気のせいじゃない。風が收まるや否や、すかすかと叔母さんに近づきひとこと。

「やりますぎです！」

「うつ。でも、これが一番初心者の子にはわかりやす
「どうしても、こちらにもひとことあつていよいはずです。生徒にケ
ガでもさせたらどうするんですか！」

完全に怒つてゐる。

縮こまつて言い訳する叔母さんが最後まで言い終わらないうちこ
彼女を叱り飛ばした。

「大体あなたはいつも大雑把すぎるんです。あなたの魔法に対する

知覚が優れていることは認めますが、だからと言つて感覚だけで魔法を使うことが危険だというのは常識でしょ。それを生徒にきちんと教えるのも私たちの仕事なんですよ！」

「あ、う。は、はい。「ごめんなさい」

青筋を立てて怒りを露わにするフェイル先生に、叔母さんがちょっと涙目になつて萎れた。

まあ、確かに叔母さん今のはちょっと不味かつたかも。

フェイル先生が言うことも一理ある。

学校で教師をするということは、よそぞまの子どもを預かるということに他ならない。

子ども同士の喧嘩ならともかく、授業中にケガをさせたとあっては教師としての面目が立たないし、責任問題にもなりうるのだ。

フェイル先生はそれを指摘したに過ぎない。

一応僕も【橋本誠也】だった頃は教師を目指してた身だし、それぐらいはわかる。

フェイル先生はしばらく叔母さんを睨んだ後、彼女の処遇について通告した。

「もう結構です。止められなかつたこぢりにも落ち度はありますから。ただ、この件はしっかりと学長に報告させていただきます」

「えつ！？」

「せいぜい叱られて反省してください。あ、減給は免れないでしょ。うね。きっと書類もいろいろと書かされるとは思いますが、自業自得です」

「ちょ、フェイル先生っ！」

「クビになりたいですか？」

それを言われれば、もう黙るしかないだろうなあ。

叔母さんは涙目をぐつと堪えて「わかりました」と頑垂れた。

「では、授業を再開しましょう」

叔母さんを叱つたことですつきりしたのか、フェイル先生の表情はいつもの真面目なものに戻っていた。

が。

「あ、それと」

言い忘れたと言わんばかりに叔母さんを見てこう言つた。

「これから先、ダットくんは私が見ます。あなたに任せていたらとんでもないことになりそうですか？」

これには叔母さん完全に撃沈。

僕に教えられるつて判定が出たときに物凄く喜んでたから、これは何よりの罰だろう。

抗議しようにもフェイル先生の方が先輩になるので、立場的には叔母さんが弱い。

「というわけで、ダットくん。よろしくお願ひします」

生真面目なこの顔は絶対に今言つたことを実行するに違いない。多分僕が叔母さんがいいと言つても無駄だ。

「え、と。じゃあ。お願いします」

「ごめん。叔母さん。僕じゃ逆らうの無理。

追い打ちをかけられて膝をつく叔母さんに、周囲の生徒が「哀れだ」と呴いていたのは聞かなかつたことにした。

「で、どうだつたわけ？ 初めての魔法」

一般的の授業を受けるための教室で絡んできたのはエリクだった。エリクは魔法の素養がないため、午前中いつぱい取られていた【基礎魔法学】の授業は受けていない。本人は別にそれを気にしてはないようだが、興味だけはあるらしい。

「どう……つて。別に。午前中いっぱいと魔素を集める練習してただけだよ」

叔母さんの魔法によつて一時は大変だったが、その後は普通に授業は進められた。と言つても実技なので最終的には初心者、中級者、上級者と分かれてそれぞれ出来ることをしただけだ。

僕はフェイル先生の指導を受けて、叔母さんの魔法で感じ取れた魔素が引き寄せられるあの感覚を再現するため、初心者ゾーンで四苦八苦しただけで授業が終わつたけど。

フェイル先生に言わせれば、「最初の最初はそんなもの」で、あと何度も繰り返すうちに覚えるそのなので、『気長にやりなさい』と言は繰り返し練習あるのみのこと。

何度も繰り返すうちに覚えるそのなので、『気長にやりなさい』と言われた。

「ふーん。魔法つて面倒だな」

昼食に持つてきた弁当を机の上に出すと、エリクが横に陣取つた。
「そりやね。しつかり制御しないと暴走して危ないわけだし。簡単にはいかないよ」

そう答えた僕の脳裏に浮かんだのは自動車だった。

あれもしつかり前を見据えて運転しなければ事故に繋がる代物だからこそルールあり、免許が必要だった。

それと同じで魔法はそう簡単に得られるようなものじゃない。

僕はこの最初の実技授業でそれを実感されられた。

「ま、そりやビーでもいいんだけどさ」

じゃあ聞くな。と言いたくなるような台詞を吐いたエリクが背後を振り返る。

「あいつ。ビーさんの？」

「いや、どうするって聞かれても」

エリクのように振り向かずともわかる、とある視線。

朝からずっと感じるそれに僕は肩をすくめた。

「ライナのヤツ。わかりやすすぎだつての」

そう。視線の主はエリクの言つ通りの人物のものだ。ほんの少し視界を動かし、その端から見えたのは昼食らしいパンを銜えた銀髪少女の姿。しかも睨むようにこちらを窺つている。

「朝、おはようって声かけたら逃げられるし。そのくせこっちを窺つてるし。凄くわかりやすいんだけど、ちょっとやりづらいね」

「ま、そんだけセーカク変わつてりやな。こないだ見舞い行つた日の帰りがけ、あいつおまえの正体暴いてやるつて叫んでたぞ」

「あー、どうも納得してないっぽいな。とは思つてたんだけど。やっぱりそつなるんだ」

実は【基礎魔法学】の間も彼女の視線は感じていた。

ライナも僕と同じで魔法を使う素養を持つていて、彼女の方がそれに関しては一年先輩だ。

僕が前世の記憶を取り戻す前までは「あたしがちゃんと教えてあげるから大丈夫よ！」と息巻いていたのだが……

「すっかり警戒されちゃつたなあ」

「そのうち飽きるんじゃね？」

エリクは気楽にそつ言つと自分の弁当を食べ始めた。
だといいけど。

ジャガイモに似た芋を蒸かしただけの味氣ない代物にフォークを突き刺し、僕はその問題をひとまず忘れることにした。

午後の授業はジードリクスに関わる【歴史】の話で始まった。

ジードリクス王国は元々すぐ北に位置するラグドリアという帝国の領土で、かつては魔物が横行する未踏の地だったそうだ。

それを人が住めるように開拓した人間こそ、ジードリクスの初代女王ルリア・ジードリクス。

【救世の聖女】とも呼ばれる人物だった。

そしてその女王をその横で助けた人物がダードリー・ウィットトカイ・シド。

二人もまた【双黒の比翼】という二つ名を得ている。

それが約一百年前のこと。

ジードリクス王国を愛する人間であれば、誰でも知っている英雄物語である。

教壇に立つ年配の茶髪の女性 カリイナ先生と言ひ がよく通る声で三十人ほど集まつた子どもたちに語りかける。

「北の帝国ラグドリア。彼ら三人は元々帝国の民でした。今でこそかの国は平定を取り戻し、民も穏やかに暮らしていますが、その当時は権力者が弱い者を虐げることが当たり前の状態だったようです。ルリア・ジードリクス。後の建国の女王は元々帝国貴族の娘でした。彼女が残した手記にはその当時のことが鮮明に記されています。あえてここでは語りませんが、教科書には載つてるので、興味がある人はそちらを読んでくださいね」

カリイナ先生はそう言って途中の内容をスルーした。

それも仕方ないというかなんというか。

僕は手元の教科書の抜粋されたその部分を読んで苦笑いを浮かべた。

『平民は奴隸として売買され、粗相をすれば斬り捨てられる。ある夜会では老若男女が地下で賭けをしていた。奴隸同士を闘わせ、殺

し合わせるのだ。親子、兄弟、姉妹。負けた方に訪れるのは死。そこから逃れるために相手を殺す。時には自ら命を絶つ者もいた。帝国の都は煌びやかだったが、その裏では魔物よりも非情な世界が広がっていた』

この教室にいるのは大体が九歳から十一歳までの中間層。
低年齢層の子どもにはちょっと刺激が強い内容だ。

読まずに済ませる気持ちもわかる。

もう少し年上 十二歳から十四歳程度 になると踏み込んだ授業もあるらしいが。

日本だったら絶対にあり得ない内容だが、この辺は異世界だからなのか、それとも文化の違いだからなのか。

そのあたりのことは置いておいて、有名な建国の女王とその仲間についての説明は続く。

「彼女は、十五歳になると行動を起こしました。帝国を変えるために動き出したのです。けれど周囲の賛同は得られず、窮地に陥ります。反逆の罪を被せられ投獄されたのです。そこで出会ったのがダードリー・ウイットでした。彼もまた現状に意義を唱えた帝国貴族の子息。一人は絞首刑になるはずでしたが、幸運なことに義賊によって助けられます。名はカイ・シド。これが英雄三人の邂逅でした」
「ここから先三人は様々な苦難に遭遇し、立ち向かっていくことになる。」

脱出先で出会った奴隸扱いの者たちを救出して帝国南部の同じ志を持つ貴族の元へ逃がしたり、助けられずに処刑される場面に出会つたり、悔いている彼らと師匠となる魔法使いと出会つたり、人間の言葉を理解する魔物に遭遇したり。

様々な偶然と巡り合わせと彼らの行動力の結果がジードリクス王國という国を作り上げた。

「元々魔物の領域であつたこの地の開拓は、決して容易ではなかつたといいます。戦える人間も少なく、死者もまた多く出たそうですが、彼らは諦めずに少しずつ人が生きていける環境を整えていきま

した。そして同じ頃、帝国内でも変化が起こります。帝国の現状に不満を持った地方貴族達が連携して動き始めたのです。その先頭に立つた人物が後の新生ラグドリア皇帝ルジュア・ルアール・ラグドリアでした

「実はこのルジュアという皇帝、元々帝国の第三皇子でルリア・ジードリクスとは友人で幼馴染みだつたらしい。

思想もよく似ていてそのせいで彼は地方に左遷。ルリアたちが追われた後、密かにその跡を追つて支援などをしていたそうだ。ルリアたちの元には続々と奴隸扱いをされていた人間が集まつていた。中には脱走兵などもいたらしい。更には魔物と闘うということもあり、傭兵なども雇うこととなり、気がつけば帝国の一箇師団にも負けないくらいの戦力が出来上がつていた。

そうして。

「ルジュア皇帝とルリア女王は同時に立ち上がりました。女王は帝國からの独立を宣言。帝国はそれを認めず、最大戦力で軍を送りました。この間、帝都の守りは手薄になります。ルジュア皇帝はその隙を持つて帝都を占領しました。この知らせを受けた軍はすぐに取つて引き返しますが、元々民にはよく思われていなかつた彼らはこれによつて瓦解。敗走することになつたのです」

やがて、帝国内での肅正が終わりを見せる頃。

ルジュア皇帝は改めてルリア女王に独立を認めるとの声明を発表。

よき隣国であることを約定にて制定した。

別に帝國がちゃんと皇帝によつて肅正されたんだから独立しなくてもいいんじゃない?とも思つところもあるが、それは奴隸として扱われてきた人々の心身上のこともあり独立という方向で決着したそうだ。

と、大体おおまかな国の成り立ちはこんなものだろうか。

実際はもつといろんな意図が絡まつてたんだろうけど、過去のことは過去の人間にしかわからない。

未来にいる人間としては、残された証拠からそれを想像するしかないわけだしね。

「というわけで」

カリイナ先生はここにこと笑みを浮かべながら指を一本立てた。「この話はみなさんもよく知っていることだと思いますが、今日の課題はこの建国にまつわることについて感想文を書くこととします」と言ふ……？

僕は思わず、手元にある見た目黒板ミニチュアサイズのそれに目を落とした。紙の供給量が少ないこの国でのノート代わりになるもので、対になつた木の棒で文字を書く仕様になつていて。

少量の【魔鉛石】と両方に特殊な細工の【紋章】が刻まれていて、【紋章】同士を触れ合わせることで文字が消える。という仕掛けの【魔道具】で便利なのだけれど、所詮は黒板。感想文を書くほどのスペースはない……んですけど。

同じ教室にいる四十人弱の子どもたちも普段なら絶対にすることのないことを言われて戸惑つている様子だった。

そんな僕たちの反応をカリイナ先生は微笑むことで制すと、一体いつこの教室に持ち込んだのやら。普段用いることのないはずの紙の用紙を教卓の上に持ち出す。

そして次には。

「紙も書く道具も揃えていますから、安心してください」「でん、とペンやらインクやらが入っているらしい箱を取り出した。……いや、だからそれ何処から出てきたの？」

確かに授業が始まる前にはそこには何もなかつたはずなんですが。というか、カリイナ先生教室に入ってきたとき、教科書以外のものは持つてなくなかつたですっけ。僕の見間違い……？」

いろいろ突つ込みたいのは山々だったが、カリイナ先生は続きを話す。

「実は学長が、皆さんの口頭の成果を見たいということで気まぐれに提案してくれやがりまして。普段は触ることのないものに触

れてみるのも一興だとこのようなことと相成りました」

ふう、と息を吐くカリイナ先生。その表情がどこか疲れて見えるのは見間違いないだろう。一部棘付き発言も含まれていた。

ていうか今、野郎言葉入つてましたよね。

いつも落ち着いた雰囲気を崩さない穏やかな彼女の意外な一面を垣間見てしまった僕を含めた生徒たちは、それぞれ隣の席同士で顔を見合せた。

そんな微妙な空気が流れる中、前の方の席に座っていた生徒が手を挙げて発言する。

「せんせー。それって試験つてことですか？」

それは年に一度紙を使ったテストが行われるためのことだつたが、前回のテストは半年前にあつたばかりだからそれはないはず。

予想通りというかなんというか。

「いいえ。今回これは違います。あくまでも学長の提案で行われる突発的事故、とでも思つてください」

カリイナ先生は首を振つて否定した。

やっぱりなんだか、発言内容がおかしいけど。

学長となにかあつたんだろうか。ここは学長はちょっと変わつてることで有名だし、その関連……かも。

「まあ、それは横に置いておくとして。課題の件です」

氣を取り直したカリイナ先生は閉じた教科書を持ち上げる。

「教科書に載つていることだけを題材にしてもよいですし、もう少し詳しいところを書きたければ書庫へ行つて調べてもらつても構いません。建国に関わることならなんでも結構です。ただし、提出は

今日中にお願いしますね」

つまり、この後はほぼ自習状態となるわけで。

「わからない字などがあれば質問に応じますよ」

という言葉を最後にその場がわつとうさくなつた。

友だち同士でどうするか相談を始めたのだ。が、残念なことに僕の側にはそれを相談する相手がない。

ヒリクは年齢が二つ上なので十一歳から十四歳までの上級生の教室に回されているし、同じ教室にいるライナは僕の事を警戒して近づいてこない。

その他の子どもたちも、僕との接点があまりないため相談相手になりようがなかつた。

さて。ではどうするか。

少し考えてみたものの、決断は早かつた。

歴史の勉強、感想文（後書き）

補足。

【魔導具】 魔法使いのみが扱える道具。 魔法補助器具。 魔法を制御し導くため道具。

【魔道具】 魔法使い以外でも扱える魔鉱石を使用した道具。 日常生活等で使用。

カリイナ先生の許可をもらい、ミーチュア黒板もどきを抱えて向かつた先は学校内に作られた書庫の入り口。

重厚な扉を開けて入室したその瞬間にやつてくるのは古い本独特のかび臭さ。それに合わせて貸し出しのカウンターに座っていた金髪の女性が僕の姿に気付いて声をかけてきた。

「ダツト……？」

「こんにちは。ショリナ叔母さん」

午前中に会つたばかりの叔母が驚いたように立ち上がり、その肩口で切りそろえられた金髪が舞う。

彼女の表情が気まずそつなのは、僕がサボりでここに来たと思ったからか、それとも朝のことがあつたからか。

「え、どうして？ なんで……？」

「授業で感想文を書きなさいって言われたから。その資料探しに来ただ。今日中に提出って言われたから。多分他にも何人かは来ると思うよ」

「感想文？」

僕が抱えたミーチュア黒板もどきを叔母さんが不思議そうに見下ろす。

「試験、じゃないわよね」

「うん。学長の指示だつて。カリイナ先生が紙を用意したからそれに書いて提出しなさいって」

「え。学長、の？」

「カリイナ先生は学長の気まぐれだと、言つてたけど」

「あー、学長の気まぐれか

叔母さんが苦笑いを浮かべた。

「でも、それにしてはまともね。いつもなら【全生徒対抗魔法の宝探し】とか【農仕掛けの陣地取り合戦】とかそういうのを企画して持つてくるのに

「あー、あつたね」

領主さまの友だちが開発したとかいう新作【魔道具】景品にしたり、学校中いろんな農仕掛けで、先生たちが丸一日片づけに奔走したり。

他にも突発的に【自警団に負けるな障害物捕り物競争】とか【難問百解いたらこれで君も天才に】などなど自警団を巻き込んだり、たいして意味のないクイズ大会をしてみたり。

しかもそれは魔物が町に襲撃をかけてくるのと同じぐらいの頻度でやつてくる。

教師陣もノリの良い人間はいいのだが、後始末が毎度大変なのでどちらかというと不評だった。

カリイナ先生が奇妙な言動をしてしまったのも、多分その大変さからなんだろうなあ。と考えることにする。

まあ、今回のこれは単に感想文を書けというだけなわけだし、それならそうおかしなことにはならないはず。

叔母さんも言うだけ言ってみたもののたいして深い意味はないだろうと判断したようだ。

話題はすぐに課題の中身に戻る。

「それで感想文って、なんの感想文を書くの？」

「ジードリクス王国の成り立ちについて。それについてならなんでもいいって」

「あり。じゃあちょっと奥の方になるわね。でも、ダットくらいの子が読めるような本は少ないわよ」

「え、そうなの？」

「ええ。資料になりそうなものは難しく書いているものがほとんどだもの。子ども向けとなると……やっぱり簡単で装飾された話が多

いから」

「そうは言いつつも、捜してくれる気はあるのか、叔母さんはカウンターから出てきてくれた。

自分の受け持ちの魔法系授業がないときは書庫が定位置の彼女だ。どこにどんな本があるかは把握しているはずだから、読みたい本を探すなら任せることだ。

「それを覗くとやはり難しいかな。あまり子供にはあまり見せたくないような描画が入ってるのも多いし」

「え、駄目？」

「駄目じゃないけど。感想文を書くだけならあの教科書だけでも出来ると思うわよ。おすすめはできないなあ」

となると、教室に逆戻りするのが正解ってことだろうか。

「もう少し上の子達たちなら読めそうなものもあるんだけど。ちょっと違う切り口で感想を書いてみたいって思うなら、わたしが選んで口頭で教えるのもありだけど。どうする？」

どうする、って言われても。

一応叔母さんも魔法系の授業の担当だけど教師なわけだし、それだと他の教師の授業に割り込む形になるのはないだろうか。

……ちょっと微妙だ。

「え、と。叔母さん。とりあえず、本があるところに案内して。本は僕が選ぶから、読んでほしくないような本だつたら言つてくれる？ そうしたら別にするから」

そう言つたら、叔母さんはちょっと驚いた様子で目を瞬かせた。

「あーあ。本当に姉さんの言つたとおりなのね」

誰に向かつて言つでもなく、彼女は呟く。

「叔母さん？」

「姉さんから聞いたわよ。記憶喪失になつたら一気に性格が大人になつちやつて困つてるつて」

「えー？」

「その通りね。態度が全然子どもじくないし、しゃべり方も前と

違うし。利口すぎるわ。まるっきり別人ね」

……母さん。一体何を叔母さんに喋ったんだら？。

少し不安だつたけれど、心配性な母さんに比べるとこの叔母さんは樂観的思考の持ち主で。

「まあでも、姉さんが大丈夫だつて言つてたし。わたしだつて魔物とそういうじゃないものとの区別はつくわ。だから心配しなくても平気よ」

「え、あ。はい」

心配するまでもなく、叔母さんは自分の中でいろんな事に決着を付けたみたいだ。

けれど。

「ただ、油断はしないこと」

少し安心した顔の僕に、彼女は忠告を付け足した。

「いくら家族があなたをちゃんとあなただつて認めて、赤の他人は簡単にはいかないわよ。明らかに、あなたの変化は異常だもの。気を付けなさいね」

「はい」

そこは言われずとも、と言いたいところだが素直に受け取る。

心配して言つてくれてるわけだし。

猫を被る、のは無理にしてもある程度隠すべき所は隠すつもりではある。

最初はそこまでする必要はないと思つていたんだけど、その辺りは今朝父さんに散々言い念められた。

「出来るだけ気を付けるつもりです」

にこりと笑つてそう返答すると。

「だったらその喋り方はしないほうが賢明ね」

もつと子どもらしくしなさい、と額を弾かれた。

軽くだけど、痛いよ叔母さん。

少しだけ恨みの念を込めて睨めば「「めん」「めん」と彼女は笑つ

た。

「じゃ、時間がなくなるといけないからさつと捜しましょ。」
まだある程度余裕はあるけれど、感想文の提出は今日中だ。時間は限られている。

僕は歩き出した叔母さんの背中を追つて、少し小走りになつた。基本書庫は大声厳禁。それは異世界でも同じで、叔母さんと僕の足音が薄暗い書庫の中に響く。

明かりは小さな天窓から入る僅かな太陽の光と、かるりうじて文字が読める程度に調整された光を発する【魔道具】のみ。

貴重な本を出来るだけ痛まないようにするための処置ではあるが、足下まではしつかり照らしてはくれない。しかも床は石畳。たまに出っ張りがあつたりするので注意して歩かなければいけなかつた。

「あ、そうだ」

やや下向きの視線で追いかけていた叔母さんが横目で僕を振り返る。

暗がりの中でも見えるその田はちよつと悪戯っぽく輝いていて、僕はなんだか嫌な予感を覚えた。

実際その予感は外れてはいなくて。

「ライナちゃんと早く仲直りしなさいよ」

僕はため息を吐いた。

まあ、叔母さんも僕やエリクやライナのことによく知っている人の一人だし。

今朝の【基礎魔法学】の授業で一緒にいなかつたところも見ているのだから、何かあつたと思つて当然ではある。

「……失敗した？」

なんとなく予想はついてるぞ。と大人特有の余裕の笑みがちょっと気に入らないけど、その通りなので反論はしない。

「なんか変な疑惑持たれてる」

多分、父さんの時と同じような【魔物憑き】疑惑だらうけど。

「お見舞いに来たとき、ちょっと説明したんだけど納得できなかつたみたいで」

「あー。急なダットの変化についていけなかつたわけだ」

「はい。的確なご指摘ありがとうございます。」

「なるほどね。それであんな警戒した目をしてたんだ」

「ええ。まあ。朝からあんな感じで、すつごに視線感じてやうづらいつたら」「

しかもその様子を周囲にばつちり見られているのだ。

本当ならいつも一緒にいる【ダット（僕）】とライナが別々に、しかも一方的に睨んで睨まれての光景は全員が奇異に思つて当たり前の光景だ。

それが好奇の目を生み、じろじろと朝からちよつと鬱陶しい視線も混ざつていた。

前世の僕のモットーは平凡で平穏のはず……だつたんだけど、どこでどうおかしくなつたのか疑問だ。

叔母さんは楽しそうにそんな僕のしかめつ面を見下ろしている。「ま、仕方ないわね。あの子はお姫様を守る凄腕戦士よ。今まで守つてた相手がいきなり別人みたいになつたんじや、すぐには信じられないで無理もないわ」

「叔母さん。その例えちょっとヤダ」

「ここで騎士という言葉が出てこないのは騎士といつ職種がこの国にないからだけど。でも。

「……お姫様つて」

僕は男。男ですよ。

「ふふ。遠くから見てたらそういう見えるわよ。ここに通い出してからはずつとそうじやない。ダットを虜めようとする子を片つ端からやつつけてたのは主にライナちゃんよ。ヒリクくんもたまに手を出しうたみたけどね」

それは僕も知つていて。

自分に自信がなかつたから、からかつてくる相手に何も言い返せずに黙つていることしかできなくて。そんな時は大抵ライナやエリクが駆けつけて来ていたことを思い出す。

それだけじゃない。

【ダット（僕）】が一人の時に絡んできた数人が後でケガをしていて、ライナも似たようなケガしていたこともあった。

それは守られていたということに違いないだろう。

実際に【ダット（僕）】はそう感じていたし、同時に申し訳ないとも思っていた。

「そんなライナちゃんだからきっと今のダットが不安なんじゃないかしら。今まで彼女が守ってきたダットが急にいなくなつたわけでしょう。家族でさえ別人みたいに思えるんだもの。だから納得がいかなくて、疑つてるんだと思うわよ」

「だから、あんな態度を？」

「少なくとも、わたしはそう感じたわね」

そう叔母さんは言って立ち止まる。

一瞬目的地に着いたのかとも思つたが、違つた。

「あのね、ダット」

振り返った叔母さんが、腰を落とし僕の視線に自分の視線を合わせる。

「きっと、ライナちゃんは急に大人になつたダットがダットだつて認識できただけだと思うわ」

「え？」

「今、あなたに起きている変化は本来長い年月をかけて起こるべきだったものよ。人は最初は未熟な子どもだけれど、やがて成熟した大人へと変わっていく。あなたはどういう理屈かはわからないけれど、その工程を全て通り越して大人の態度を取るようになつてしまつた。それが周囲にどれだけ動搖を与えると思う？ わたしから見ても、あなたはまるつきり前のあなたとは違う別人に見えるわ。ふとした動作、癖なんかが、以前のダットと同じだと気付かなければきっとそう断言していたわね。ダット。彼女は子どもよ。大人の視点で、わたしと同じようには見ることができないの。それを忘れて大人の言葉を押しつけるのは駄目。理屈じゃなくて、ちゃんと心で

ライナちゃんと向き合つ。それが子どもらしじつて」と。感謝の気持ちだつたり、気に入らないからつて怒つたり。ちゃんとその感情を言葉にしなくちゃ伝わらないわよ

だから、と叔母さんは最後に笑つて。

「ライナちゃんと友だちでしょ。受け容れられなかつたのなら仕方ない、なんて氣取つたことは考えずにどーんと自分の気持ちをぶつけてきなさい」

【魔導具】である指輪を身につけた指が、僕の背後を示す。

つられて振り返つてみれば、一つ、二つ向こうの本棚の影。そこには見覚えのある銀色の髪の束が一本見え隠れしていく。

「ばればれ？」

うん。隠れてるつもりで、隠れられてないな。

「かわいいわよね。ほんとこ

叔母さんは楽しいと嬉しいの両方を含めた表情でうんうんと頷いている。

青春だね。とでも思つてゐるのかもしれない。

「……今、授業中だよ。一応」

「あらー。真面目ね。でも、じつこのまきつかけが肝心。ほら、行つてきなさい」

しつしつ、と犬を追い払つかのような仕草をされて、僕は大きく嘆息した。

多分この様子だと資料になる本の所まで案内してもらえやうにな
い。

「行つてくる」

僕はそうして来た道を逆に戻つていき、銀色の髪が揺れていますの場所で顔を覗かせて声をかけたら。

「ライ」「さやーつ！」「

……逃げられた。
なんでそつなる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0544x/>

闇色の二重奏

2011年10月9日06時48分発行